Phantom of Fate

不知火新夜

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの日、３人の兄弟が父親と交わした約束。

父親の背に憧れ、正義の味方を目指す少年、衛宮士郎。

士郎への並々ならぬ想いを抱き、その理想の為の剣となる少年、衛宮零。

そして士郎への愛を胸に、その側に寄り添う少女、衛宮天音。

時が経ち、３人はその約束を果たす為に、己が命を賭けた戦いに臨む…！

目次

登場人物、宝具設定 ―― 1

1日目『開戦』

1日目―1 ―― 6
1日目―2 ―― 12
1日目―3 ―― 18
1日目―4 ―― 24
1日目―5 ―― 29
1日目―6 ―― 35
1日目―7 ―― 40
1日目―8 ―― 45
1日目―9 ―― 52

2日目『暗躍』

2日目―1 ―― 56
2日目―2 ―― 62
2日目―3 ―― 67
2日目―4 ―― 71

登場人物、宝具設定

◎登場人物設定

○衛宮士郎（えみやしろう）

ＣＶ：杉山紀彰

身長：１６７ｃｍ

体重：５８ｋｇ

バイク：ヤマハ・ＷＲ２５０Ｘ

使用する銃器：ＦＮ・ＳＣＡＲ―Ｈ　Ｌｏｎｇ、トンプソン・コンテンダー（７．６２×５１ｍｍＮａｔｏ弾対応）

今作での主人公で、原作での主人公。原作とは違って、己の在り方について薄々ながら感づいてはいるが、一方で自分が目指すべき正義の味方の『あるべき姿』を模索している。

【１日目】学校に忘れていた工具箱を取りに行った帰りにサーヴァント同士の戦いを目撃、その片方であるランサーに襲われ、一度は撃退するも屋敷で再び襲撃を受け、窮地を打開する為に行ったサーヴァントの召喚儀式によってセイバーを召喚した。その後、桜の説明を受けて聖杯戦争に臨む決意を固め、教会で参加表明した帰りにイリヤ達の襲撃を受けるが、自らの宝具である『終結すべき業火の剣（レヴァンティン・シュトルム）』の力と、ライダーの奇襲で撃退した。

○衛宮天音（あまね）

ＣＶ：ゆかな

身長：１６２ｃｍ

体重：４７ｋｇ

３サイズ：Ｂ８５／Ｗ５７／Ｈ８３

使用する銃器：ＦＮ・ＳＣＡＲ―Ｈ　Ｓｔａｎｄａｒｄ（ＥＧＬＭ装着）

今作のメインヒロインで、士郎の義妹。イメージはファントムオブキルのレーヴァテイン（アマネ）。

【１日目】士郎がセイバーを召喚した際、どういう訳かセイバーの魔力供給を担う事になった。

○衛宮零（ぜろ）
ＣＶ：緑川光
身長：１８２ｃｍ
体重：８３ｋｇ
バイク：ヤマハ・ＷＲ２５０Ｒ
使用する銃器：ＦＮ・ＭＡＧ
士郎の義弟。イメージはファントムオブキルのレーヴァテイン（ゼロ）。
【１日目】屋敷でランサーからの襲撃を受けた際には前線を受け持ち、ランサーと互角の勝負を繰り広げた事で、士郎がセイバーを召喚する為の時間を稼いだ。
○セイバー
ＣＶ：川澄綾子
身長：１５４ｃｍ
体重：４２ｋｇ
３サイズ：Ｂ７３／Ｗ５３／Ｈ７６
属性：秩序・善
ステータス：筋力：Ａ　耐久：Ａ　敏捷：Ａ　魔力：Ａ　幸運：Ａ＋　宝具：Ａ＋＋
スキル：対魔力：Ａ　騎乗：Ａ　直感：Ａ　魔力放出：Ａ　カリスマ：Ｂ
士郎（と天音）のサーヴァント。
【１日目】士郎によって召喚されるも、天音が魔力供給を担う様になった事、その天音の魔力量が膨大（セイバー談）な事から原作と比べて大幅に強化されたのが判明した。
○間桐桜（まとうざくら）
ＣＶ：下屋則子
身長：１５６ｃｍ
体重：４６ｋｇ
３サイズ：Ｂ８５／Ｗ５６／Ｈ８７
今作のサブヒロイン。士郎を原作とは違って『お義兄さん』と呼ぶ

一方、零を『先輩』、天音を『お義姉さん』と呼んでいる。
【1日目】士郎達がランサーに襲撃された折にライダーと共に駆け付け、聖杯戦争に関わる事となった士郎達に、それに関して説明したり、その際にライダーの真名をばらす等、積極的に関わっているが…

○ライダー／メドゥーサ
ＣＶ：浅川悠
身長：１７２ｃｍ
体重：５７ｋｇ
３サイズ：Ｂ８８／Ｗ５６／Ｈ８４
属性：混沌・善
ステータス：筋力：Ｂ　耐久：Ｄ　敏捷：Ｂ　魔力：Ｂ　幸運：Ｄ
宝具：Ａ＋
スキル：対魔力：Ｂ　騎乗：Ａ＋　単独行動：Ｃ　神性：Ｅ－　魔眼：Ａ＋　怪力：Ｂ
桜のサーヴァント。今作では最初から桜がマスターの為、全力を発揮出来る。

【1日目】イリヤ達が襲撃して来た折、バーサーカーが蘇生している隙を突いてイリヤを奇襲、撤退させた。

○イリヤスフィール・フォン・アインツベルン
ＣＶ：門脇舞以
身長：１３３ｃｍ
体重：３４ｋｇ
３サイズ：Ｂ６１／Ｗ４７／Ｈ６２
バーサーカーのマスター。

【1日目】教会から帰る所だった士郎達を襲撃するが、其処でライダーの奇襲にあって人質として捕まり、尚もバーサーカーに戦闘続行する様指示しようとした為に右腕を切り刻まれて気絶する。

○バーサーカー／ヘラクレス
ＣＶ：西前忠久
身長：２５３ｃｍ
体重：３１１ｋｇ

属性：混沌・狂
ステータス：筋力：A＋　耐久：A　敏捷：A　魔力：A　幸運：B　宝具：A
スキル：狂化：――（B）　神性：A　戦闘続行：A　心眼（偽）：B
勇猛：A＋
イリヤのサーヴァント。今作では平常時の狂化が原作より更に抑えられている為、片言ながら喋る事が出来る。
【1日目】イリヤに同行しセイバー達と交戦したが、士郎の『終結すべき業火の剣（レヴァンテイン・シュトルム）』によって7回も殺された上『十二の試練（ゴッド・ハンド）』による蘇生の隙を突かれてイリヤがライダーの奇襲を受け、人質にとられてしまった為に撤退を余儀なくされた。
◎宝具設定
○レヴァンテイン
由来：己の在り様に気付いた士郎がたどり着いた1つの『答え』
士郎の宝具。イメージは魔法少女リリカルなのはのシグナムが使用する同名のデバイス（但しカートリッジシステムに当たる部分がオミットされている等、一部違いがある）。
●終結すべき業火の剣（レヴァンテイン・シュトルム）
ランク：A＋
種別：対人宝具
レンジ：1～10
最大補足：1人
レヴァンテインの、剣としての姿。
○悪戯好きの魔弾（フライクーゲル）
ランク：？（弾丸の種類によって変わる。7．62×51mmNato弾の形ならC）
種別：対人宝具
レンジ：1～99
最大補足：1人
由来：ドイツの民話伝承に登場する悪魔の弾丸
士郎が投影した宝具の1つ。狙った標的に『命中する』という結果

を作ってから『発射する』因果逆転の呪いが掛かった、『必中』の魔弾。

1日目『開戦』

1日目―1

それは或る月が綺麗な夜…

これこそが武家屋敷だと言わんばかりの存在感を見せる屋敷の縁側で、1人の男性と、彼の子供と思しき3人の少年少女が揃って月を眺めながら団らんのひと時を過ごしていた。

▪

「子供の頃、僕は正義の味方になりたかったんだ」

そんな中、3人の父親である男性は、ふとそんな事を呟いた。

「なりたかった？じゃあ今は正義の味方じゃないのかよ？」

「生憎、今は違うんだ。正義の味方というのは期間限定で、大人になると名乗るのが難しくなるんだ」

「食品か何かかよ…」

その呟きに疑問を覚えたのか、3人の内の1人である赤毛の少年が男性に質問すると、男性は苦笑いを浮かべながらそう答え、その答えにもう1人である銀髪の少年がツッコミを入れる。

「はは、そうだね。正義の味方って、困っている人を助けるイメージがあるけどさ、誰かを助けるという事は、誰かを助けないという事だ」

「あちらが立てばこちらが立たずって事…？」

「良く知っているね、天音（あまね）。結局、正義の味方って言うのは、とんでもないエゴイストなんだ。そんな事、もっと早くに気が付けばよかった」

そのツッコミに笑ってごまかしつつ、より詳細に話をするも、其処はまだ小学生、何が何だか分からないと言いたげな2人の少年に対して、残りの1人である銀髪の少女は男性が何を言いたいのかが分かった様子だった。

「そうか。俺は天音みたいに、親父の言っている事は良くわからない。けど、正義の味方になるって事はすごく難しいっていうのは分かった」

「それに、正義の味方って言っても色んなのがあるって事も」
その少女の言葉にも何処かちんぷんかんぷんだと言いたげな様子の2人だったが、要点は掴めたのかそう言葉を繋げ、
「ならさ、俺、正義の味方になるよ。俺なりの『正義の味方』に」
「だったら俺はそんな士郎(しろう)の、士郎にとっての『正義の味方』になる」
「私も士郎の、士郎にとっての『正義の味方』…」
少女と共に己の決意を示した。
「そうか。ああ…
安心した」
それを聞いた男性、衛宮切嗣(えみやきりつぐ)は何処か心の荷が下りたかのような穏やかな表情を浮かべ、永遠に目覚める事のない眠りについた…

「夢か。久々に見たな、あの時の事」
その光景が真っ白に染まったかと思ったら、一瞬の内に見知った天井に早変わりした様に、今しがた目覚めたばかりの少年は一人、呟く。
「正義の味方、か。俺が目指すべき『正義の味方』を見つけるのは、何時になるんだろうな…
と、何時までもこうしちゃいられない。今週は零達(ぜろ)の当番とはいえ、待たせて良い訳ないからな。おーい天音、朝だぞ。起きろ」
「ん、ふにゅう…
士郎、おはよぉ…」
「ああ。おはよう、天音」
その夢の内容を反芻して、何処か遠い目になっていた少年であったが、恐らく自分達の起床を待っているであろう家族の事を思い出して頭を切り替え、己の布団の中に一緒に入っていた少女を起こす。
その少女、天音と呼ばれた物凄く長い銀髪の少女は『寝起きが悪い』という表現がぴったりな、それでいて何処か可愛げのあるうめき声を上げながらも、己を目覚めさせた少年におはようの挨拶を交わし、その少年、士郎と呼ばれた短い赤毛の少年もそれに返事した。
「眠い、だるい、ふぃ…」
「ほら天音、零達が待っているんだから二度寝しようとしないで、さっ

さと着替えて此処を片付けようぜ。あまり人に見せて良い物じゃないからな、これ」
「別に良い、士郎と私が愛し合っているのは公然の事実だし…」
「いや良くないから！藤ねぇ辺りに見られた日には俺達お説教だぞ、小一時間くらい！」
　然しながら眠気が全然覚めていない影響か、再び眠りにつこうとする天音、それを阻止しようとする士郎の眼前には、確かに色んな意味で『見せられないよ！』と立て看板を置きたくなる光景が広がっていた。
　皺だらけかつびしょ濡れな掛け布団、同じく皺だらけでびしょ濡れな余り本来の役目を果たせなくなっているシーツ、辺り一面に散乱している丸まったティッシュ…
　そしてその光景を見やる２人は揃って一糸まとわぬ姿で、士郎の男性としてはやや小柄ながらもがっしりした体躯と、天音の華奢ながらも出るべき所は出ている体躯が露わになっていた。
　この光景と２人の言葉等を考えるとまあ、昨晩２人に何があったのか、この２人がどういう関係になっているかは言うまでもないだろう。
　ともかくそんな事があったこの光景を見せびらかす訳にはいかない、士郎は着替えを始めながらも並行して部屋の片づけを行い、天音も渋々ながら、というか立ったまま居眠りしそうになりながらも着替えつつ士郎の手伝いを行う。
　と、其処で、
「ん？士郎、それ…」
「どうしたんだ、天音？」
「その左手の跡みたいなの、どうしたの…？」
　士郎の異変に気付いた天音が声をかける、それに応じて士郎が自らの左手に視線を向けると確かに、手の甲に傷跡らしきものが刻まれていた。
「あれ、何だこれ？昨日まで無かった筈だけど、寝ている間に何処か擦ったかな？」

「気を付けて、士郎の身に何かあったら…」
「分かっているよ、天音」
「なら良い…」
　左手が傷付いた事に関して全く身に覚えのない士郎はその事に疑問を覚え、天音がその身を案じるがそれも数秒の事、再び其々の作業に戻り、2人が起きてから数分して、士郎が何処かの学校の制服らしき茶色の上下を、天音が上に白いTシャツと黒いジャケット、下に黒いホットパンツを身に纏った時には、部屋の様子は少なくとも人前に見せても問題ない状態になっていた。
「じゃ、行こっか天音。零達、首を長くして待っているだろうから」
「分かった…」
　流石に昨夜の影響で澱んだ空気までは直ぐにどうこう出来ない、そう思い、2人は部屋の扉を開け放ったまま、既に朝食の準備を整えてスタンバイしているであろう家族の待つ居間へと向かう。
「おはよう。ベストタイミングだな、士郎、天音。丁度用意が終わった所だ」
「おはようございます、お義兄さん、お義姉さん」
「あー遅いよ、士郎に天音！お姉さん待ちくたびれちゃったよ！」
「おはよう。零、桜（さくら）、それに藤ねぇ。悪い、ちょっと遅くなった」
「余り大きい声出さないで、大河（たいが）…」
「タイガー言うｎ「煩いっての…！」ぶべら!?」
　案の定というべきか、其処には零と呼ばれた士郎と同じ様な服を身に着けた短い銀髪の、少年というにはあまりにもガタイが良すぎる男性、桜と呼ばれた士郎達と同じ学校のそれらしき制服を身に着けた紺色の髪の少女、そして藤ねぇ、或いは大河と呼ばれた茶髪の女性の3人が士郎達を待っていて、テーブルには色鮮やかなイタリア料理、それも朝食という場に合った物の数々が並んでいた。
　その中で大ｇ…げふんげふん、藤ねぇが天音の呼び名に反応するも、その余りの大声にキレた天音の腹パンで即座に昏倒するというシーンがあったが、それは一先ず置いて、
「それじゃあ、いただきます」

「「「いただきます」」」
　士郎の、この家の家主である士郎の合図と共に朝食は始まった。
「それじゃ、行ってきます！遅刻遅刻～！」
「気を付けろよ、藤ねぇ」
「行ってら、大河…」
「相変わらずメシ食うの早ぇな藤ねぇ、ちゃんと味わっているのか…？」
「あ、あはは、藤村先生は藤村先生なりに味わっていると思いますよ、先輩…」
　と思ったのもつかの間、瞬く間に朝食を平らげた藤ねぇは何やら急いだ様子で屋敷を出て行った。
　その様子に何処か呆れた様子になったり、慣れたと言わんばかりに朝食を食べながらも見送る言葉を送ったりと、その反応は様々であったが、これも一先ず置いておこう。
「ご馳走様。それじゃあ行こうぜ、士郎、桜」
「はい。先輩、今日も後ろお願いしますね」
「それじゃあ天音、何時も悪いけど、洗い物とか頼むな」
「うん、士郎」
　やがて士郎達も朝食を食べ終え、そのうち天音を除く３人は学校へ行く準備を整え、
「それじゃ、皆行ってら…」
「ああ、行ってきます」
「行って来る、天音」
「はい、お義姉さん」
　士郎は『オフロードのＲ１』の触れ込みでヤマハ発動機が市場に送り出したスーパーモタード『ＷＲ２５０Ｘ』、零と桜はその兄弟機であるトレール（デュアルパーパス）『ＷＲ２５０Ｒ』に搭乗し、天音の見送りを背に学校へ、３人が生徒として、先程慌てて出て行った藤ねぇが教師として籍を置く穂群原学園への道のりを疾走して行った。
　だが彼らは知らない、先程士郎達が見つけた士郎の、左手の甲に刻まれた傷跡、あれが後々彼らの運命を大きく動かすきっかけになろう

とは…

1日目―2

それから何時もの通りに学生としての日常を過ごし、家がお寺の生徒会長や、ワカメみたいな髪をした桜の兄、嘗て士郎が所属していた弓道部の女性部長等から頼まれ事を引き受ける、なんて事も無く家路についた士郎と零であったが、

「あちゃー、工具箱を学校に置いて来ちゃったよ。コンテンダーの手入れをしたかったんだけどな」

「珍しいな、士郎がそんなうっかりをするとか」

其処で士郎が学校に忘れ物を、愛用していた工具箱を置いて来てしまった事に気付いた。

因みに士郎が手入れしたがっているコンテンダーとは、アメリカのTC（トンプソン・センター・アームズ）Aが製造販売している『トンプソン／センター・コンテンダー』、銃身を取り換えるだけで様々な弾丸を発射出来るようになるという拡張性と、ライフル弾であっても発射に耐えられる堅牢性から人気の高い、単発式の中折れ式拳銃だ。

まあそれ以前に何故、銃刀法等の法律によって銃火器の個人所持・使用が厳しく制限されている日本の、それも高校生である士郎がそんな物を所持しているのかと疑問に思うかも知れないが、それに関してはまたの機会に説明しよう。

然しながら今は夕飯の準備がある、という事で夕飯の後に工具箱を取りに行く事にした。

「それじゃあ、行って来るよ」

「ああ、士郎。此処最近、この辺り物騒だからな、気を付けろよ」

「行ってら、士郎…」

そして日もすっかり沈み、夕飯を食べ終えた士郎は、零と天音の見送りに応え、学校へと戻って行った。

念の為、工具箱を取りに行く序でに手入れしようと持ち出したコンテンダーと『愛用の刀』を装備して。

「ふぅ、こんな感じで良いかな」

程無く学校に到着、自らが籍を置くクラスの教室で目的の工具箱を見つけた士郎は、その場でコンテンダーの手入れを始めた。
士郎が所有しているコンテンダーは、所有者である士郎の年齢と比べてかなりの年季物、故に汚れ等から手入れすべき箇所も散見され、作業する士郎の入れ込み様は、それはそれは凄まじい物だった。
「さて、テストを始めるか…！」
その手入れも数分の時を経てひと段落し、士郎はテストと称してとある動作を行った。
右手に持っていたコンテンダーの中折れ部分を開き、左手に持っていた７．６２×５１ｍｍＮａｔｏ弾をコンテンダーのバレルに装填、そして開いていたコンテンダーを閉めた。
いうまでも無く、コンテンダーの弾丸装填である。
尚、今コンテンダーに装填した７．６２×５１ｍｍＮａｔｏ弾は本来狙撃銃や機関銃、ガトリング砲等に使うべきフルロードの小銃弾であり、幾ら堅牢性の高いコンテンダーでも使用を想定していない（一回り大きい上位モデルの『アンコール』は想定した造りとなっている）、そんな弾を何故士郎がコンテンダーに使っているのか、そもそも銃だけではなく何故弾丸まで持っているのかと疑問は尽きないだろうが、それに関してもまたの機会に説明しよう。
「２秒か。まだまだ親父の壁は厚いなぁ」
装填に掛かった時間を確認した士郎、どうやら自分の目標には遠く及ばなかった様でため息をついていた。
ともあれこれで目的は済んだ、既に手入れされたコンテンダーと、その為に使った工具箱を片付け、家に戻るべく愛車のＷＲ２５０Ｘを停めてある駐輪場へと向かおうとした。
が、
「な、何だよ、これ…！」
ふと聞こえて来た何か武器同士が激しくぶつかり合う様な音、その方向に振り向くと其処には、異様な光景が広がっていた。
青ずくめな恰好で赤い槍を構える男と、赤い外套を羽織って白黒の双剣を構える男、２人の男が己の武器で敵を討つべく刃を交え合う、

何時の時代の決闘かとツッコミを入れたくなるであろう光景、だが実際にツッコめる者はほぼいないだろう。
何しろ余りにも速すぎる両者の立ち回り、剣撃、時折放たれる蹴撃…
『人間離れした』という表現すらも不十分な位の2人の決闘、士郎が視界でまともに捉えられるのは、一瞬の鍔迫り合い位の物であった。
その現実の何歩も先を行った光景を見る士郎の脳裏には、零が先程忠告した原因となっている、此処最近この冬木市において多発している怪事件の事が浮かんだ。
（まさか、アイツらが！）
その犯人である可能性が頭に浮かび、2人に対する恐れよりも怒りが勝ってコンテンダーを構えようとしたのが原因か、その2人の近くに見知った、というかこの穂群原学園で知らない人はいないと言って良い存在がいる事を認識したのが原因か、何が切っ掛けなのかは定かではないが、
「誰だ！」
「っ！」
その2人のうちの片方、青ずくめの男が士郎を捉えてしまった。
その視線を感じるや否や、士郎は飛び退く様に校舎へと引き返して行く。
だがその足は単に逃げる為だけでは無く、昇降口の物陰、柱の裏側…
青ずくめの男がいた校庭から距離を少しずつ離しながらも、何度か待ち伏せするかの様に隠れて身構える、いや実際に待ち伏せして襲撃を狙っていたであろうその姿からは、やはり士郎の心中に、先程の怒りがまだ残っているであろう事が伺えた。
だが、
「よお。追いかけっこは終わりだぜ」
「何っ!?」
向かって来るであろうと目測を立てていた方向を警戒していた士郎、だがその真逆、今の士郎の立ち位置から真後ろで聞こえて来た男

の声に、その怒りも消え失せ、それは焦りへと変化する。
慌ててその方向へと振り向いた士郎だったが間に合わず、男が構えていた槍が士郎の心臓へと突き刺さる――――

「くっ！」
「ほぉ、今のを受け止めるとはな。人間にしちゃあ中々やるじゃねぇか、坊主」
寸前、左腰に挿していた刀を瞬時に抜刀し、左手で峰を握りつつ槍を抑え込む事で何とか攻撃を避ける事が出来た士郎だったが正に間一髪、改めて青ずくめの男の超人振りに恐れを抱かずにはいられなかった。
「だが、オラぁ！」
「ぐぁっ!?」
然し敵は士郎の様子など知った事ではない、己の槍の一撃を受け止めた事に感心しつつも自分のやる事は変わらないと言いたげな様子で槍を握る腕に更なる力を入れ、それを抑えていた刀を士郎ごと吹っ飛ばした。
とはいえ士郎もそれを想定しない筈は無かった、吹っ飛ばされた勢いで身体がスピンしながらも既に反撃の手段を打つべくその手は動いていた。
吹っ飛ばされたその瞬間に、峰を握っていた左手を離し、瞬時に左腰のホルスターに挿していたコンテンダーを抜き取り、右手で撃鉄を起こし、振り向きざまにその銃口を敵の顔面へと向ける…！
「はっ！無駄だ、俺に飛び道具は通じ――――」
「喰らえ！『悪戯好きの魔弾（フライクーゲル）』！」
青ずくめの男が何か言っている様だが構う物か、士郎は覚悟を決

め、照準を合わせて引き金を引いた。
それと共に甲高い銃声を伴って放たれる７．６２×５１ｍｍＮａｔｏ弾、それは――――

「な、ぐぁっ!!??」
寸分の狙い違わず、男の右眼に直撃した。
炸裂音と共に飛び散る血漿と眼球の破片を見て、自分が放った弾丸は確かに敵に命中したのだと確信した士郎。
「ぐ、が、あ、て、てめぇ…！」
「あ、あの一撃を食らってまだ立っていられるのか、何となくそうじゃないかとは思っていたけど…！」
だがそれでも尚、激痛及び流れる血涙を押しとどめる為に右眼を抑えながらも、未だ健在な敵の姿に、士郎は警戒を新たにした。
無理もない、今しがた士郎がコンテンダーで放った７．６２×５１ｍｍＮａｔｏ弾は、元々使用を想定していたアサルトライフルでの全自動射撃において、威力過剰による反動の大きさという弱点こそ抱えるも、それを抜きにすれば対人用途において十分な有効射程と殺傷能力を有した弾丸、それが人体において比較的柔らかい眼球に直撃したとなればそのまま貫通し脳へと到達、標的を即死させるのは明白だからだ。
その筈が見た所、男の眼球で弾丸が留まっているという状況、もはや目前の男は人の形をした化け物では無いのか？そんな考えが士郎の脳裏に過る。
となれば…！
「くそ、待ちやが――――」
「『壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）』！」

「ギャアアアアア!?」

改めて逃走を再開しようとする士郎と、それに追いすがろうとする青ずくめの男、次の瞬間、士郎の掛け声とともに男の右眼、正確には右眼を貫いていた弾丸が爆竹の様な甲高い炸裂音と共に爆発、余りの衝撃によって男は苦悶の声を上げながら倒れ伏し、それを確認した士郎は大急ぎで逃げて行った。

この時の出来事によって、これから待っているであろう『戦争』に士郎達は踏み込んでいくことになるのだが、今はまだ、それを知る者はいない…

1日目―3

「零！天音！」

　忘れ物を取りに学校へ戻って行った士郎が帰り際に青ずくめの男から襲撃を受けてから数分、ＷＲ２５０Ｘのエンジンをフル稼働させて屋敷へと戻った士郎は、大急ぎで自分の帰りを待っているであろう弟と妹に事態を伝えるべく、玄関の扉を勢いよく開けながら２人の名を叫ぶ。

「お、お帰り、士郎。一体どうしたんだ、そんな慌てた様子で？」

「どうしたの、士郎…？」

　その只ならぬ士郎の様子が気になったのか、出迎えつつ訳を聞いて来た零と天音に、

「今すぐ武器庫に行って、其々の武装を持ってきてくれ！訳は向かいながら話す！」

「ぶ、武器庫だと!?成る程、余程切迫した状況って事か、分かった！」

「うん…！」

　士郎はそう日本の、というか余程の豪邸でない限り何処の国でもまず聞かないであろう部屋へ同行して欲しい旨を告げつつその部屋へと急ぎ、かなりの危機的状況だと察した２人も士郎の言う通りにした。

「学校から帰ろうとした時、とんでも無い連中と出くわしたんだ。何か赤い槍を持った青ずくめの男と、双剣を持って赤い外套を身に着けた男が、校庭で決闘紛い、いや正しく決闘だと言える事をしていたんだが、その際に青ずくめの方に見つかって、襲撃を受けた。何とか追い払う事は出来たけど、直前まで気配を察知させずに背後に移動するわ、右眼から銃弾が直撃してもそれが貫通しない上にその状態で立っていられるわで、アイツらは人間の形をした化け物じゃねぇかと思ったよ、そういえば決闘での立ち回りもお互い余りに速くて、眼で追いきれなかったし…！」

「成る程、そりゃ只事じゃねぇな。もしかしたら此処最近この街で起こっている事件にも関係が…!?」

「もしかしたらまたその青ずくめ、若しくはソイツと戦っていた赤い外套の男が士郎をって事…！」
　その最中に行われた士郎からの状況説明、普通に考えたら荒唐無稽だと一笑に付されてもおかしくない内容ではあるが、士郎の只ならぬ様子を察知した２人はそれを信じ、そして今後降りかかって来るであろう危険を理解した。
　やがて士郎達がとある部屋に辿り着く、それは物置の様な場所であったが、
「よっと！」
　部屋の中に置かれている洋服箪笥、その背広を立てかける部分を開き、奥の壁を一押しすると、その壁が後退したかと思ったらまるで自動ドアの様に横へと開き、其処から何処かへと繋がっている階段が広がった。
　その階段を、慣れた様子で下って行く士郎達、それが終わると其処には、自動小銃、機関銃、狙撃銃、散弾銃、対物ライフル、拳銃、グレネードランチャーといった銃火器に軍用ナイフ…古今東西の軍隊で使われる武器や兵器が保管されている空間が、武器庫と呼ぶに相応しい空間が、日本はおろか世界中の政府に喧嘩売っていると言って良い空間が広がっていた。
　その中から士郎は、ベルギーのＦＮハースタルがＵＳＳＯＣＯＭ（アメリカ特殊作戦軍）向けに開発したバトルライフル『ＦＮ　ＳＣＡＲ―Ｈ』のＬｏｎｇモデルを、零は柄が捻れた様な形状の赤黒い大刀と、ＦＮハースタルが半世紀以上も前に開発して以来各国の軍隊で愛用され続けている機関銃『ＦＮ　ＭＡＧ』を（何故か１０ｋｇ余りあるＭＡＧを片手で）、天音は２振りのサバイバルナイフと、ＦＮ　ＳＣＡＲ―ＨのＳｔａｎｄａｒｄモデルに専用グレネードランチャー『ＦＮ　ＥＧＬＭ』を装着した物を装備し、来た道を引き返していった。
「多分奴等はこの街で何かとんでもない事を起こそうとしているのかも知れない、それが明るみに出ると不味いから、多分あの青ずくめの男は目撃者である俺を始末しようとしたんだと思う。そっちは『壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）』も使って倒したから来ないとは思う、けど赤い外套の

方はまだ…！」
「口封じってか、そういう類の連中が考えそうな事だ。だが士郎を殺させやしない、士郎は俺が護る…！
　来やがれ化け物、俺が完膚なきまでに潰してやる…！」
「目に物を見せて上げる…！」
　各々の装備を整え、これから来るやも知れない敵に対処すべくスタンバイする3人、その間にも状況を整理したり、戦意を高めたりする等して準備を進めていく。
　そして…！
「来たぞ！」
　屋敷中に鳴り響く警報音、侵入者を知らせる音が耳に入ると同時に、3人は動き出す…！
「喰らいやがれ！」
　士郎と天音が扉を開くと同時にスタンバイしていた零が、庭先に入って来た侵入者へと強襲を仕掛け、同時に士郎と天音が装備していたＳＣＡＲ―Ｈを、
「『悪戯好きの魔弾（フライクーゲル）』！」
　その宣言と共に標的へと構えた、が、
「よぉ坊主、さっき振りだな。眼ん玉の借りを返しに来たぜ」
「な、お、お前は!?」
「士郎の驚き振り、そしてテメェの台詞と、その右眼の眼帯…
　成る程、テメェが士郎を襲撃した青ずくめか、だがまさか生きていたとはな…！」
「なんて出鱈目な、本当に化け物…！」
　その侵入者の姿に、士郎は驚愕した。
　そう、今しがた零と鍔迫り合いを繰り広げているのは、先程士郎が撃退した筈の、寧ろ殺したと言っても良い青ずくめの男であったのだから…！
　だがその驚きも一瞬の内、零が回り込んだのを見計らい、構えていたＳＣＡＲ―Ｈをフルオートで発砲する士郎と天音、しかし、
「効いてない…!?」

「やっぱりかよ…！」
「ったく、人の背中にバカスカ撃ちやがって、痛えじゃねぇか。けどさっきから妙だな、俺に飛び道具は届かねぇ筈だが…？」
　敵の痛がる様子こそあれど、発砲された７．６２×５１ｍｍＮａｔｏ弾がその背を穿つ事は無く、全て弾かれてしまった。
「そうだ、零！眼を狙うんだ！」
「了解だ！『悪戯好きの魔弾（フライクーゲル）』！」
「おっと、そうは行くか！」
「うおっ!?」
　その際に何か妙な事を口走っていた様子であったが気にする余裕はない、士郎は比較的柔らかいであろう眼を狙い撃ちする様に零へ指示を飛ばし、零も応じてＭＡＧを敵の眼に構えようとするも、そうはさせまいと敵が持っていた槍を回転、銃身が叩かれた事で狙いを逸らされてしまい、挙げ句その状態で引き金を引いてしまう。
「ちぃっまたか！」
　射線を踏まえると士郎達に弾が降り注いでしまう事が容易に想像出来てしまう最悪の状況、だがそれでも、ＭＡＧから発砲された弾が着弾したのは敵の方だった、尤も相変わらず弾かれたままではある。
　だがこれによって、
「だがこれでタネは割れたぜ。テメェらがさっきからバカスカ撃って来る弾丸、ありゃあ宝具、それも標的に当たるという結果を作ってから発射される、そんな類の効果を持った代物だろ？だから飛び道具が届かねぇ筈の俺に直撃した、例え今みてぇに射線を外していても。そうだな？」
「っ！」
「口に出さずとも、そのマヌケ面でバレバレだぜ、坊主。しかしまさかと驚きはしたが、そうと分かれば対策は立てられる」
　士郎達が先程から連射している、弾丸が持つ『力』を見抜かれてしまい、
「急所じゃねぇ所で受け止めちまえば良いだけだ！」
「くっはぁっ！」

疑問が解けた事で、もう怖くないと言わんばかりの猛攻が始まった…！

先程士郎が校庭で見た、いや余りの速さに目で追いきれなかった敵の攻撃、対峙している零も持っている大刀を用いて対処してはいる、だが防戦一方なのは明らかで、士郎と天音が状況を打開しようと援護射撃に移るも、今言い放った言葉が出鱈目では無いと言わんばかりに全て弾かれてしまった。

しかも、

「くそ、弾切れか！」

「士郎、こっちも…！」

弾倉に入っていた弾丸を使い切ってしまい、２人は庭先の土蔵へと、ストックの弾丸を取りに行かざるを得なくなってしまった。

（どうする、このまま弾丸を補充した所で防がれるのは明らかだ。『コイツ』を使えばもしかしたら何とかなるかもしれないけど、零達を巻き込む危険が高い。でもこのままじゃ俺も零も、天音も…！

何でさ、まだ何も果たせていない、まだ『俺』を分かり切っていない、まだどうしたいかすらも決まっていない、零も天音もそうな筈かも知れないのに、此処で皆揃って殺されなきゃいけないんだ…！

こんな、こんな馬鹿な事があってたまるか！何か、何か他に方法は、そうだ！）

「天音、もう暫く零の援護を続けてくれ！ちょっとやっておきたい事がある！」

「士郎…？」

「いいから、早く！」

「わかった…！」

まさに絶体絶命の状況、その余りにも理不尽な事態に憤慨しながらも何か打てる手はないかと士郎が模索していたその時、何か閃いた様子で天音に指示を送った。

それを受け入れて再び庭へと向かった天音を背に、土蔵に残った士郎はとある書物を開き、

「あった、これだ！よし、『同調開始（トレース・オン）』…！」

そして、自らの『力』を、自らの『在り様』を、解き放つ…！
「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する…！」
書物の内容に従い、呪文の様な文言を次々と口にして行く士郎、それが進んでいくたびに、士郎の足元が、まるで魔法陣か何かの様に特徴的な模様で輝き始める。
「な、何だ？まさかあの坊主が…!?」
「あれは一体…？」
「士郎…？」
その異変は、土蔵の外にいた3人も感知し、それまでの戦いは何処へやら、中の様子を伺おうとして来ていた（無論、各々戦闘態勢を緩める事無く）。
（今朝、何でついたか全く分からないこの左手の傷跡。でも今、コイツの意味が何となく分かる…！
行ける！この傷跡が、行けると言ってくれている！）
「――告げる！汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に！聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ！誓いを此処に！我は常世全ての善と成る者、我は常世全ての悪を敷く者！」
そしてその模様から『力』が吹きあがり、
「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――！」
それは眩き光となった…！

「サーヴァント・セイバー、召喚に応じて参上した。問おう。貴方が私のマスターか」
光が晴れた其処には、騎士の様な出で立ちの少女がいた。

1日目―4

「問おう。貴方が私のマスターか」
「マスター…？
て事は、君が…」
青いドレスの上に鎧を身に纏った、金髪碧眼の、士郎達より少し年下くらいの少女が、あの呪文の様な言葉の果てに現れたという事態に、士郎は何処か夢うつつな様子であった。
そんな状態でふと見せた、左手の甲に刻まれた傷跡、それを見た少女は、それが答えだと確信した様子を見せた。
「令呪と貴方とのラインの繋がりを感知しました。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の命運は私と共にある。此処に、契約は完了しました。我がクラスはセイバー、此れより短い期間ではありますが、宜しくお願いします、マスター」
「な、ならセイバー！呼び出して早々で悪いけど、外にいる青ずくめの槍使いを、て、あれ？」
そんな少女、セイバーの言葉を聞いていて一先ず我に返った士郎は、今自分達が置かれている状況を思い出し、彼女に迎撃の指示を出そうとしたが、青ずくめの男の姿は既に庭にはいなかった。
「零、あの男はどうしたんだ？」
「悪い士郎、取り逃がした。こんな状況でサーヴァントと当たるのは分が悪いな、とか何とか言って」
「さーヴぁんと…？」
「マスター、彼らは？」
庭で迎撃していた零に尋ねると、どうやらセイバーが呼び出された事に己の不利を悟ったのだろう、既に撤退した後だった。
そんな会話を交わす士郎達、其処でこの場にいる士郎以外の２人の存在が気になったのか、セイバーが零と天音について士郎に聞いて来た。
「あー、セイバー？その、マスターって呼び方はちょっと…
俺は衛宮士郎。士郎って呼んでくれ。で、其処でデカい剣を持って

いるのが俺の弟の零、俺の側で銃を持っているのが俺の妹の天音だ。
零に天音、彼女はセイバーだ」
「ああ。士郎の弟の、衛宮零だ。宜しくな、セイバー」
「士郎の妹で、妻の天音。宜しく、セイバー…」
「衛宮…？」
「ちょ、天音、初対面のセイバーにいきなりそういうのはって、セイバー？」
「いえ、お気になさらず。シロウに、ゼロに、アマネですね。分かりましし、新手か！」
　セイバーの質問に士郎が答え、零や天音がそれに応じて自己紹介していた(その際に、天音が色んな意味でヤバい爆弾を投下していた)最中、セイバーが何かを感じ取ったのか、見た目からは信じられない程の跳躍力で屋敷の外壁を飛び越え、外へと飛び出していった。
　その只ならぬセイバーの様子を見た士郎も、
「そうだ、あの赤い外套の男！アイツもこっちに追って来ているかもしれない！セイバーは恐らくソイツの気配を察知したんだ！俺達も急ごう、零、天音！」
「分かった、士郎！」
「うん、士郎…！」
　学校で青ずくめの男と対峙していた赤い外套の男の存在を思い出し、追って来たのをセイバーが察知したであろうと推測を立て、零達と共にセイバーの援護に向かう。
　だが、
「くっ！」
「ライダー！」
「あ、あれ…？」
「さ、桜？」
「桜に、後は誰だ？あれ、赤い外套の男はいない…」
　其処にいたのは赤い外套の男でも、その側にいた見知った同級生でも無く、桜と、紫色の長髪にバイザーで両眼を覆った、ボディコン服を纏う大柄な女性であった。

何かの気配を察知して外へと飛び出していたセイバーは、姿かたちこそ見えないが何か剣らしき物をその女性に振りかざし、女性は釘の様な形状の短剣を2つ交差させてそれをガードしていた。
「はっ今はそれを気にしている場合じゃない！セイバー、剣をおろすんだ！」
「何を言うのです、シロウ。彼女達は敵だ、此処で仕留めるべきだ」
「桜は敵じゃない、俺達の家族なんだ！」
家族同然の存在、その知り合いであろう女性にセイバーが斬りかかるという状況に、慌てて士郎が止めに入ろうとする。
「そうでしたか。ですが我が眼前の彼女は違うでしょう、彼女はサーヴァントだ。隙を見て斬りかからんとも限らない」
「というかセイバー、そのサーヴァントって一体何なんだ？」
「「へ？」」
それでも尚、剣を収めないセイバーに対して投げ掛けられた士郎の疑問、それはセイバーや女性、そして桜をポカーンとさせた。
「あの、お義兄さん…？
もしかして、聖杯戦争とか、サーヴァントとかって聞いた事ありません？」
「いや、全く…
セイバーを召喚したのも、土蔵にあった書物を見ながらだったし…」
「そうでしたか…
分かりました、そしたら順を追って説明しますね。まあ、私も細かい所までは分かりませんが…
先輩もお義姉さんも、それでいいですか？」
その疑問に対応したのは桜、何個か上げた単語について士郎が知らないと見るや、説明を申し出て来た。
「あ、ああ。頼む、桜」
「助かる、桜。もう何が何だかって感じだったんだ」
「お願い…」
「はい。そしたらライダー、暫く霊体化させるね。セイバーさんを警

戒させたままなのは良くないし」
「了解です、桜」
それに士郎達が快く応じたのを受けて、ライダーと呼ばれた女性はまるで幽霊の様に姿を消していった。
それを受けてセイバーは何処か戸惑った様子を見せたが、敵対者がいなくなったのを見て、やっと剣を下ろした。
「桜、今のは…？」
「それに関しても説明しますね。そしたら、此処じゃあれですし、中で話しましょう」
「わ、分かった。入ってくれ、皆」
そして、５人（＋ライダー）は状況説明の為に屋敷へと戻って行った。

「それにしても、今更ですが驚きです。先輩達も魔術師だったなんて…
この屋敷に張られている結界も今やっと気づけた位、精巧に出来ているし…」
さて桜達が屋敷に戻り、状況説明が始まろうとしている所であるが、先程から非現実的な単語が飛び交うのにツッコミを入れたくなるだろう、然しながらどれも彼らに、士郎達にとっては現実的に存在する物だ。
魔術。
簡単に言うと『魔力』と呼ばれるエネルギーを用いて人為的な神秘、奇跡を引き起こす為の技術である。
それによって引き起こされる神秘や奇跡には、例えば何処からともなく火を起こしたり、風を巻き起こしたりといった世間一般で魔術と呼ばれているイメージ通りの物や、物の強度を上げたり（先程士郎がコンテンダーで７．６２×５１ｍｍＮａｔｏ弾を発射出来たのも、この恩恵である）等様々だがその全ては『現代の文明の力で再現できる物』と定義されており、再現出来ない程の神秘は『魔法』と呼ばれている。

その魔術を使う存在が魔術師、と此処まで聞くとそんな結論に辿り着くであろうが、厳密に言うとそれは正しくない、その中には魔術師と呼ばれず『魔術使い』と呼ばれる存在もいる。
それに関してはともかく、士郎も、零も、天音も、そして桜も、この魔術を扱う存在だという事、セイバーもライダーもその関係であるという事は頭に入れて置いて欲しい。
「まあ、とは言っても俺達を魔術師と呼ぶには、ちょっと語弊があるけどな。それはいいや、それより桜、そろそろ説明を頼む」
「はい、わかりました」
士郎達が魔術師だった事、彼らの家に張られた結界が物凄く精巧だった事に驚いていた桜に、士郎が説明を促し、状況説明は始まった
…

1日目―5

「まずは聖杯戦争について、ですね。聖杯戦争は読んで字の如く、あらゆる願いを叶えると言われている願望機『聖杯』の所有権を巡って起きる戦争の事です」
「戦争だって？戦争って、一般的な意味での、あの戦争の事か？それが、この街で…!?」
「はい、正しくその戦争です、お義兄さん」
　開口一番で桜の口から出た『この街で戦争が行われている』という言葉…
　それを聞いた士郎の脳裏に、此処最近勃発している怪事件や、先程の青ずくめの男の襲撃等が過って思わず渋い顔になるも、桜に話の続きを促す。
「と言っても、存在を知ってさえいれば誰でも加われる、という訳ではありません。基本的にこの戦争に加われるのは、選ばれた魔術師７人のみ。その選ばれた魔術師の証と言えるものが、令呪と呼ばれる物です。お義兄さんは最近、何処からともなく傷跡がついた、なんて事ありませんでした？」
「ああ、そういえば今朝、左手の甲に何時付いたかわからない傷跡があったけど…
　あれ、何か赤くなっている様な…？」
　その桜からの質問に、士郎が己の左手の甲に目を向ける、すると其処に刻まれた傷跡が赤みを帯び、何やら模様らしきその姿の全体像が浮き彫りになっていた。
　その形は何処か剣の様に見える。
「それが令呪です。それがこの戦争に加われる資格であり、この戦争を戦う上で重要な、様々な役割を持った物です。その１つが、セイバーさんやライダーといったサーヴァントとの契約書と言える物。サーヴァントは一言で、この聖杯戦争を戦う上で重大なパートナーです。先輩達も目の当たりにしたでしょうが、サーヴァントは人間では太刀打ちできない程の戦闘能力と、一般的な兵器では傷１つつかない

と言って良い防御力、そしてさっきのライダーみたいに霊体となって、普通の人から殆ど感知できなくするステルス性を有しています。基本的にサーヴァントと戦えるのはサーヴァントだけです」
「ああ。あの凄まじい速さの立ち回りに、目玉にしか銃弾が効かない程の頑丈さ…
　正直、殺されてもおかしくは無かったと思う」
「うん…」
　桜からの説明が続く中で、士郎達は先程の青ずくめの男――サーヴァントと呼ばれる存在との戦闘を思い出し、その化け物としか言いようのない強さに危機感を覚えていた。
　無理もない、その圧倒的な強さは、士郎は無論の事、零達も死を覚悟した程なのだから。
「と言っても、サーヴァントにも千差万別あります。その1つがセイバーさんやライダー、と言った『クラス』です。この聖杯戦争に加わるサーヴァントは其々『剣士（セイバー）』『弓兵（アーチャー）』『槍兵（ランサー）』『騎兵（ライダー）』『魔術師（キャスター）』『暗殺者（アサシン）』『狂戦士（バーサーカー）』という7つのクラスに分けられます」
「セイバーは読んで字の如く剣術に長け、ライダーは乗り物に乗って戦う事を得意とする、って感じか」
「となるとあの青ずくめのサーヴァントはランサー、その可能性が高いって訳だな」
「はい、そういう戦い方とかで分けられる事が多いですね」
　此処で士郎の脳裏に1つの疑問が浮かぶ。
　あの赤い外套の男、青ずくめのサーヴァント――ランサーと互角に渡り合った事からサーヴァントだと考えられる。
　その得物は白黒の短剣、となればクラスはセイバー、と普通は考えるだろうが、当のセイバーは自分が召喚した、側で控えている少女だし、他のクラスを考慮しても、ライダーは桜のサーヴァント、アーチャーやキャスターはあの立ち回りからして考えにくい、となるとどんなクラスなのか…
「あと、サーヴァントの個性と言って良い2つ目の要素が『真名』です。実を言うとサーヴァントは、この世界の歴史にその名を刻んだ存在、

らしいんです。例えば私のサーヴァント、ライダーの真名は、ギリシャ神話に登場するゴルゴーン3姉妹の末っ子『メドゥーサ』です」
「ら、ライダーのマスター!?態々自らのサーヴァントの真名を…!?」
「メドゥーサ!?メドゥーサって、あの髪の毛が蛇みたいになっている、あの!?」
「確か、見た物を石に変える力があるって伝承があったな」
「最後は、ペルセウスに首切られて死んだ…」
それは兎も角、真名の説明の際に桜がライダーの真名を暴露した事に関して、セイバーが戸惑いを見せる一方、士郎達はライダー――メドゥーサがどんな存在かを話し合っていた。
「御免ねライダー。でも先輩達はともかく、セイバーさんの信頼を得る為には必要な事なの…」
あ、すいません、話を続けますね。今先輩達がライダーの事について色々話し合っていた様に、真名を知られる事は正体を知られる事。どんな存在なのかが公にされてしまうという事であり、対策を立てられる事に繋がりかねない、という事です。ライダーの真名を知られると、今先輩が言った『魔眼』の効果が及ばない視界の外から襲撃されかねない、という様に。だから基本的に真名がバレない様、サーヴァントもその主人である魔術師――マスターも気を付けないといけないんです」
そのバレてはいけない真名を態々バラしたのは貴方でしょうに、と言いたげな表情を隠そうともしないセイバーだったが、その真意を図ろうとしたのか口をはさむ事は無く、桜の説明は続いた。
「そしてサーヴァントの個性と言って良いもう1つの要素、そしてサーヴァント達にとっての切り札が『宝具』です」
「宝具って、その名を宣言する事で秘めたる力を解放する、伝説の武具の事だろ?」
「え?知っているですか、宝具?」
「ああ。知っているっていうか、作れるしな、俺」
「「え」」
だが宝具の説明に入った所で、士郎から超ド級の爆弾が投下され

た。
　厳密に言えば宝具はサーヴァント『だけ』が持つ物ではない、現実に存在する宝具もあるにはあるのだが、まさかの士郎からの『作れる』発言に、桜やセイバーは勿論、霊体と化していた筈のライダーすら実体化してまで驚きを見せた。
「これが、俺が作った宝具。『悪戯好きの魔弾（フライクーゲル）』って言うんだ」
「ほ、本当の様です、桜。この弾薬から、内に秘めたる力を感じます。宝具と言っても過言じゃない…」
「そ、そうなの、ライダー…」
「シロウ、貴方は何者ですか…？」
　そんな３人に対して士郎は論より証拠だと言わんばかりに懐に入れていた７．６２×５１ｍｍＮａｔｏ弾、もといその姿となっている宝具、悪戯好きの魔弾（フライクーゲル）を差し出す。
　その弾薬から感じ取れる膨大な力を感じ取ったのか、３人も士郎の言葉が本当だと実感し、これを『作れる』と言い放った士郎が一体どんな存在なのか、戦慄が走った。
悪戯好きの魔弾（フライクーゲル）。
　世界に銃器が広まっていた１８世紀頃のドイツで語られた民話伝承に登場する、悪魔の力が宿った魔弾。
　７発セットになっているその魔弾は、７発中６発は銃撃手の思い通りの所へと飛んでいくが、残りの１発はこの魔弾を作った悪魔の思い通りの所へと飛んでいくとの事。
　今現在士郎が持っているそれにも同様の効果があるかどうかは『作った』士郎のみぞ知る、であるが、一般的な兵器では傷１つつかない筈のサーヴァント相手に眼球だけとはいえ大ダメージを負わせた事、射線から明らかに外れていたランサーに向かって弾丸が飛んでいった事の原因は、この魔弾で間違いない。
「こ、こほん。お義兄さんがどんな魔術師なのかを聞くのは後にするとして、そんなサーヴァントとそのマスターによる聖杯の所有権を巡る争い…
　マスター同士、サーヴァント同士の欲望がぶつかり合う戦争、それ

が聖杯戦争なんです」
　そんなハプニングこそありはしたが、一先ず桜は説明を終え、士郎達の様子を伺う。
「ありがとう、桜。正直、色々と超展開過ぎて分からない事ばかりだけど、一先ずその聖杯戦争が起こっている事、それが現実なのはわかった。今この冬木市で起こっている怪事件、あれらも恐らくは聖杯戦争に加わっているサーヴァント、或いはマスターが関わっているという事も…！」
　全てを聞き終えた士郎、それを受けて自らの想いを語るその口調は何処か落ち着き払った様にも聞こえるが、その手は怒りの表れか、握った拳の震えが露わになっていた。
「正直な事を言うと、俺は今すぐにでも聖杯戦争を止めたい。出来る事なら、聖杯戦争に加わっているであろうマスターやサーヴァントに、こんな戦いは今すぐに止めるんだと説得したい。そしてこれを最初に考えた奴に「人の欲望を弄んで、関係ない人たちまで巻き込みやがって！ふざけるな！」と殴り飛ばしてやりたい！」
　その怒りは余程の物か、口調にも怒りが込められているかの様な強さが感じられる。
「だけど、それは上手くいかないだろうって事も分かる。俺達は兎も角、他のマスターやサーヴァントはそれを承知で、それでもなお聖杯を求めて参加しているだろう。皆が皆、桜の様な良い子ばっかりじゃない。もしかしたら話し合いで解決できる、分かり合えるかも知れないし、そうは行かない、分かり合えないかも知れない。仮に解決できる可能性があったとしても、その間に誰かが巻き込まれるかも知れない、そうならない為に話し合いを諦めなきゃならない時が来るかも知れない」
　その怒りのままにぶちまけた理想、だがそれはほぼ不可能に近い、それを自覚してか口調はトーンダウンした、その顔には苦渋の色が浮かんでいたが、やがてそれも吹っ切れ、
「ならば俺は、聖杯戦争に加わる！加わって、なるべく早く聖杯戦争を終結させる為に戦う！」

そう、参戦を宣言した…！

1日目―6

桜から聖杯戦争に関する説明を受けて参加を決意した士郎、と此処で「そんな戦争が過去にあったとしたら、今起こっている怪事件の様な騒ぎになっていて、その存在が公になった筈。そうならなかったって事は、何処かしら秘密裏に取り締まる施設があるんじゃないか？」という疑問が浮かび、それを聞いてみた所『新都』の通称で知られる冬木市街地と、士郎達が住む深山町との境にある冬木教会がそれに当たると聞いた彼は、参加表明の為に向かう事にした。

が此処で、

「そういえば桜、どうやったらセイバーを、さっきのライダーみたいに霊体化させる事が出来るんだ？」

「それはですね」

「シロウ、それにサクラ。その件に関して、私から説明したい事があります」

流石にサーヴァントをそのまま連れて歩くのは物々しいだろう、と考えてセイバーを霊体化させようと考えた士郎、そのやり方を桜に聞いてみた所で、今まで静観を貫いていたセイバーが口を挟んで来た。

「まずマスターであるシロウとサーヴァントである私とは、令呪を通じた契約関係にありますが同時に、基本的にマスターはサーヴァントの魔力供給源にもなっております。よってこの魔力のラインを意図的に絶つ事でサーヴァントを霊体化させる事が出来ます。ところがシロウ、一つお伺いしますが、貴方の身体から魔力が流れ出ている感覚はありますでしょうか…？」

「あれ？そういえばそんな感じしない様な…

て事は、セイバーは…!?」

「いえ、私の身に魔力が流れ込んで来る感覚はあります。よって恐らくシロウが懸念しているであろう事態には至らない筈です。ただ、そのラインが…」

そのセイバーがサーヴァントの動力源である魔力供給のメカニズム（その序でに霊体化のやり方）を説明した際、士郎とそのラインが

繋がっていない事を指摘された事で彼が、いずれセイバーが魔力切れに陥ってしまうのではないかと焦りを浮かべるも、幸いその様な事態には至らないと判明した。
　とはいえ、士郎から魔力の流れを感じられないのは事実、ならばどこから供給されているのか、それを知らせるかの様にセイバーが指さしたのは…
「…天音？」
「はい、アマネから感じるのです、相当な量の、魔力の流れを…」
「私？そういえば、なんか身体から流れている様な…」
「マスターの役割を、分割したって事ですか…？」
「先程の宝具を作れるという言動もそうですが、士郎、あなた本当に何者なのですか…？」
「いや、俺だって何が何だか分からないんだが…
　悪いな、天音。聖杯戦争に、巻き込む事になっちゃって…」
「構わない、私は士郎の妻、士郎を支える事が私のやりたい事だから…」
「そうだ士郎。俺も流石にサーヴァント相手には歯が立たんが、士郎の義弟として、全力を尽くす！」
　天音だった。
　令呪の所持を士郎、魔力の供給を天音、とマスターの役割を分割して受け持つという異例の事態に、驚きを隠せない士郎達。
　だが彼らは知らない、士郎達の件は偶然の産物ではあるが、過去の聖杯戦争ではそれを意図的に成し遂げた魔術師がいた事を…
「ともかく、そしたら天音が魔力のラインをシャットアウトしたらセイバーは霊体化が出来るって事か」
「そうだと思うけど、おかしい…
　さっきからラインをシャットアウトしているのに…」
「確かに先程から、アマネからの魔力の流れが断たれる感じがします。恐らく、マスターの役割を分割するというイレギュラーな契約によって、システムに少なからず影響が出た様ですね。霊体化は出来ないと考えて良いでしょう」

しかし、これによってセイバーの霊体化が無理だと発覚、
「そ、そうか…
仕方ない、セイバーもこのまま連れて行くしか無いか。けどこのままの格好じゃあな…
天音、セイバーが着られる服を見繕ってくれないか？」
「分かった。セイバー、こっち…」
よって着替えさせた上で連れて行くことになり、数分で天音とおそろいの格好（とはいえセイバーの方が幾分か小柄な為か、所々ぶかぶかであったが）をしたセイバーが戻って来たのを受けて、改めて出発となった。
「それじゃあ、桜は何時も通り零の後ろに、セイバーは俺の後ろに乗ってくれ。天音、御免な。悪いけど、1人乗りで来てくれ」
「大丈夫。その分は後で、ね…」
「おう。任せてくれ」
士郎はＷＲ２５０Ｘの後部座席にセイバーを、零はＷＲ２５０Ｒの後部座席に桜を乗せ、天音は、どんな場所でもどんな乗り方でも気軽に楽しめる『フリーライド・プレイバイク』の触れ込みでヤマハ発動機が市場に送り込んだバイク『トリッカー』に乗り込んだ。
「これがバイクですか。ふむ…」
「ん？どうしたんだセイバー？」
「いえ。バイクと聞いて、もう少し大型で無骨な物をイメージしていましたので」
「ま、まあ俺達まだ高校生で大型バイクには乗れないから、な」
出発する前にそんな意味深な会話があったが一先ずそれは置いて、5人を乗せた3台のバイクは屋敷を後にした…

「此処が冬木教会か、何か違和感丸出しな所だな」
「だな、士郎。まあこんな欲望渦巻く戦争を裏で取り締まる奴等の根城だ、普通の教会な訳は無いか」
「中はドロッドロになっていそう…」
「あ、あはは、そんな事は無いと思いますよ…？

と、ともかく行きましょうか」
バイクでの数分の道程を経て、冬木教会に到着した士郎達、その一見すると綺麗だが何処か違和感を覚えるその佇まいに彼らが好き勝手なことを言いながらも、桜の先導で教会への道を進んだ（中立地帯という事で、セイバーとライダーは外で待機）。
「失礼する」
一言告げて教会へと入って行った士郎と、それに同行する零達、その内部は外観同様に綺麗な礼拝堂ではあったが、やはり士郎達にとって、何処か違和感を覚える物であった。
その奥にある祭壇、其処には黒い司祭服を纏った1人の男が、士郎達に背を向ける形で手を組みながら立っていた。
格好からしてこの教会の神父であろうその男は、入って来た士郎達に気付いたか、ゆっくりと振り向く。
「迷える子羊達よ、こんな夜分に何か用かな…？」
開口一番、入って来た士郎達に何用かを尋ねる神父、その声は見た目と同じく威厳に満ちた物だったが、その姿に士郎達はまたも違和感を覚えた、言うなれば、神聖な雰囲気を醸し出しながらも、どす黒い『何か』を持っている様な…
とはいえ今その事は重要じゃない。
「セイバーのマスター、衛宮士郎だ。此処が聖杯戦争を取り締まる施設だと聞いて、参加表明の為に此処に来た。アンタがその取り締まる存在か？」
士郎は左手に刻まれた礼呪を見せびらかしながら、そう告げた。
「成る程そうであったか、セイバーのマスターよ。如何にも私が今回、この第五次聖杯戦争の監督役となった言峰綺礼（ことみねきれい）だ。して、君の周りにいる者達は…？」
「俺の弟と妹だ。訳あってこの聖杯戦争に関わる事になったんだ、折角だから一緒に連れて来た」
「良いだろう。何か聖杯戦争に関して、分からない事、聞きたい事があれば答えよう」
「いや、特には無いな。零と天音、桜は？」

「俺も無いぜ」
「私も無い…」
「私もありません」
　士郎が聖杯戦争に参加するマスターであると分かった神父――言峰は、士郎と一緒にいる零達に何処か気に留めた様子こそあったが、士郎の説明で直ぐに納得、質問を受け付けたが、事前に桜から大方の事を聞いていた彼らは、特に聞きたい事は無かった。
「そうか。では改めて、君をセイバーのマスターとして認めよう。これにより7人のマスターとサーヴァントは揃い、今回の聖杯戦争は受理された。
　これよりマスターが最後の1人になるまで、この街における戦争を許可しよう。存分に殺し合いたまえ」
　そして受理された士郎の参加表明、どうやら士郎が最後のマスターだったらしく、これによって聖杯戦争は開幕となった。
　その宣言の宣言内容に、士郎は何処か渋い表情を見せたが、気にする事は無くその場を後にしようとした。
「喜べ、少年。君の願いは、ようやく叶う」
　間際、言峰は士郎に向けてそう告げた。
「それは、俺の願いを聖杯が叶えてくれる、という意味か？」
「む？違うのかね？」
「それはアンタの勘違いだ。俺は、
　聖杯戦争を終わらせる為に、終結させる為に戦う！」
　それに対し士郎は、立ち止まりこそしたが、振り返る事無くそう言い放ち、教会を後にした。

1日目―7

「今日はありがとうな、桜。いろいろと助かったよ」
「いえ、先輩達には日頃からお世話になっていますし。そのお礼と言うのはちょっと変ですけど…」
　教会での聖杯戦争への参加表明を終えた士郎達、その帰り際に士郎は桜に、此処までこの戦いに関して右も左も分からなかった士郎達の為に手助けをしてくれた彼女にお礼の言葉を掛けていた。
　それに対する桜の返答は、お世話になっている事への礼だとの物だった、が、
「それに先輩達には、一生かかっても返し切れない程の大きな恩がありますから…」
「ん？どうしたんだ、桜？」
「あ、い、いえ、何でもありません、それでは戻りましょうか。ちょっと話したい事があるので…」
「分かった。それじゃあ戻ろうぜ、皆。明日も早いし」
「ん…」
「了解だ」
「はい、シロウ」
　士郎達には聞き取れない程度の小声で何か呟いた様だった。
　それはともかく、教会での用も済んだので、6人は屋敷へと戻るべく、其々バイクに乗り（ライダーは霊体化した）発進、冬木教会を後にした。
　ところが、
「っ！皆、ストップだ！」
「ああ！早速出て来やがったか！」
「随分耳が早い…！」
「え!?ま、まさか…!?」
「下がって下さい、皆！」
「此処は私達にお任せを！」
　新都と深山町とを繋ぐ橋を渡った所で、途轍もない殺気を感じ取っ

た士郎達、即座にバイクを路肩に停車、霊体化を解いたライダーと共に周囲を警戒する。
　士郎はコンテンダーと刀、零は何処からともなく出現させた先程の大刀、セイバーは剣の様な物、そしてライダーは釘の様な形状の短刀、各々の武器を持つ事も忘れずに（先程使っていたＳＣＡＲ―ＨやＭＡＧは、物々しさを考慮して置いて来た）。
　其処へ、
「こんばんは、お兄ちゃん達」
　鉛色の肌に腰巻だけという異様な出で立ちに斧の様な大剣を装備した巨人と、紫を基調とした厚着を着込んだ銀髪に赤い眼の少女が、士郎から見て向かい側からやって来た。
　何ともミスマッチな２人組、巨人に至ってはこの寒い時期に腰巻だけという季節はずれにも程がある姿だったが、それにツッコミを入れる余裕など、士郎達には微塵も無かった。
「あれはサーヴァント、それも相当の実力を持った存在…！」
「な、何あの出鱈目なステータス…！」
「セイバーさんと互角、いや、それ以上…！」
「士郎達がそういうって事は、アレは見た目通り、文字通りの化け物って事か…！」
　その背後に控えていた巨人、もしかしなくてもサーヴァントだと分かってはいたが、士郎達の脳内に送られて来るそのステータスに驚愕せざるを得なかったからだ。
【クラス】狂戦士（バーサーカー）
【属性】混沌・狂
【ステータス】筋力：Ａ＋　耐久：Ａ　敏捷：Ａ　魔力：Ａ　幸運：Ｂ
　宝具：Ａ
　幸運以外の全てのステータスが、表記可能な最高ランクであるＡ（筋力に至っては条件によって倍化する可能性もある）となっていたからだ。
　聖杯戦争に加わっているマスターには、令呪によるサーヴァントとの契約関係や魔力供給源としての役割を持つ代わりに、ある能力を与

えられる。
その1つが、サーヴァントのクラスや属性、ステータスを把握する能力だ。
此処で言うステータスとは、最大パワーを示した『筋力』、打たれ強さを示した『耐久』、走った時のスピードや立ち回りの素早さを示した『敏捷』、内に秘めたる魔力量を示した『魔力』、運の強さを示した『幸運』、そして宝具の強大さを示した『宝具』、この6つを現している。
ステータスの大きさは、最も低いEから、最も高いAまで五段階のアルファベットで表記されているが、一部サーヴァントは条件付きで能力が倍増する＋表記や、時には本来の能力が発揮出来なくなる—表記がされる存在もある、尚これは、サーヴァント個人個人が所有する特殊能力、スキルも同じ表記である。
それを踏まえて士郎達の眼前に佇む巨人——バーサーカーのステータスを見ると、それが余りにも凄まじい物だと分かる。
彼と対峙している2人のサーヴァントと比較すると、
【クラス】騎兵（ライダー）
【真名】メドゥーサ
【属性】混沌・善
【ステータス】筋力：B　耐久：D　敏捷：A　魔力：B　幸運：E
宝具：A＋
【スキル】対魔力：B　騎乗：A＋　魔眼：A＋　単独行動：C　怪力：B　神性：E—
まずライダーとは、敏捷と宝具以外が大きく勝り、
【クラス】剣士（セイバー）
【属性】秩序・善
【ステータス】筋力：A　耐久：A　敏捷：A　魔力：A　幸運：A＋
宝具：A＋＋
【スキル】対魔力：A　騎乗：A　直感：A　魔力放出：A　カリスマ：B
ステータスがオールA（幸運と宝具に至っては倍化の可能性あり）、スキルもカリスマ以外がAランクと、これまた無茶苦茶なセイバーと

は、戦闘に直接関わるステータスで言えば互角以上だ。
尚、これらのステータス表記は全て、セイバーのマスターである士郎と天音から見た物であり、ライダーとセイバーのスキルが表記されているのは、ライダーは真名が既に判明している為、セイバーは自らが契約しているサーヴァントである為と、予め明記しておく。
「オ嬢様、ア奴ラガ…？」
「しゃ、喋った…？」
「ええ、そうよバーサーカー。さて、折角だから自己紹介と行きましょうか。私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン」
「アインツベルン…？」
「知っているのか、桜？」
「えーと、何処かで聞いた様な気がするんですが…」
セイバー達とバーサーカー、及び互いのマスター達が対峙するその状況下でふいに、強大な戦闘能力の代償として理性や言語能力が失われているのがクラスの特徴である筈なのに、側の少女―イリヤに何かを尋ねるバーサーカー。
その問い掛けが切っ掛けかどうかは兎も角、自己紹介を始めたイリヤ。
其処で名乗った名（ファミリーネーム）字が気にかかったのか、思わず反芻する桜、それに彼女か家の知り合いかな？という感じで士郎が聞いてみたが、桜は良く分からない様子だ。
が、
「やっぱりキリツグは、私の事を…！」
その様子がイリヤの逆鱗に触れたのか、激昂した様子を露わにし、
「誰をやればいいか、言わなくとも分かるよね？やっちゃえ、バーサーカー！」
「御意…！」
「っ、来ます！」
「迎え撃ちますよ、セイバー！」
控えていたバーサーカーに突撃の指示を下した。
「覚悟オオオオオオオオオオ！」

「な!?き、効かない!?」
「くっ!?何て重い…!」
　その指示を受け、セイバー達へと突撃を仕掛けるバーサーカー、それを迎え撃つセイバーとライダーだったが、まずその突撃を狙い打ったライダーが投げつけた短剣は、バーサーカーが防いだ素振りすらないにも関わらずその身を穿つことなく弾かれ、その剣撃を受け止めたセイバーは、その余りにも重い攻撃故に耐えるのが精いっぱいといった様子だった。
　圧倒的と言っても良い破壊力と耐久力、
「阻ムカ、セイバー!ナラ死ネェェェェェ!」
「っ!やぁっ!」
　その持ち主たるバーサーカーとの戦いが、遂に始まった聖杯戦争の初戦が、今幕を開けた…!

1日目―8

（さっきライダーの攻撃を防御する事無く弾き飛ばした身体の頑丈さ、となればさっきのランサーの様に、コイツが通じる箇所はごく限られる。更にあの巨体に恥じない強烈な剣撃を、あれ程の素早さで繰り出して来る。そんなバーサーカーに対して互角に立ち回るセイバーも流石だし、ライダーも身体能力で不利と判断したのか、様子を伺いながらだけど隙を突く攻撃を繰り出している。2対1、それも一方は向こうと互角の身体能力を持ったセイバーが相手だ、優位は此方にある、けど…）

「ヤルナ、セイバー！」

「其方こそ、凄まじい強さだ…！」

遂に始まった聖杯戦争、その開幕早々に始まったセイバーとライダーの2人対バーサーカーの戦い、戦況は互角、いや一見すれば此方が有利と士郎は見ていた。

バーサーカーが繰り出す素早く強烈な剣撃の数々、それらは全て自らの眼前に立ちはだかるセイバーを切り捨てんと言わんばかりに降り注ぐも、当のセイバーもまたバーサーカーに引けを取らない剣撃でそれらを受け止め、或いはいなしながら反撃する。

おまけにその中で出来た隙を突いてライダーが短剣を投げつけ、弱点を探っているその状況は、確かに士郎達に分があると言っても良いだろう。

だが士郎は決して楽観していない、見た目には防戦気味なバーサーカー、だがまだバーサーカー本人からもマスターであるイリヤからも、余裕を持っている事が感じられたからだ。

（となれば…！）

「『悪戯好きの魔弾（フライクーゲル）』…！」

自分が有効打を与え、セイバー達を援護するしかない。

そう瞬時に判断し、コンテンダーに装填されていた愛用の宝具、その真名を静かに告げ、撃鉄を起こし、バーサーカーに狙いを定める。

狙うは、ランサーのそれを貫いた時と同じ、眼球部分…！

「喰らえ！」
士郎が引き金を引いた事で放たれる魔弾、それはバーサーカーの眼球めがけて一直線に飛んでいく。
セイバー達と激戦を繰り広げていたバーサーカーがその存在に気付くも時すでに遅し、魔弾はバーサーカーの眼球を捉え、
「なっ!?」
「効カヌ！」
貫く事はおろか傷をつける事すら叶わず、弾かれた。
（馬鹿な、今の銃撃は『悪戯好きの魔弾（フライクーゲル）』の名を解放した、正に宝具による攻撃、幾らサーヴァントで、耐久Ａとはいえ、眼球に喰らって無傷で済む筈が……！）
「現代兵器を使った魔術師らしからぬ戦闘方法、其処までキリツグそっくりなんだ……！
でもそんな豆鉄砲、バーサーカーには通じないよ。何てったってバーサーカーはね、ヘラクレスなんだから」
「何!?」
「へ、ヘラクレスだと!?」
「ヘラクレスって、あの……!?」
「ヘラクレス!?まさか……!?」
その信じられない状況に驚きを隠せない士郎、そんな彼らに向かってイリヤはあろう事か、バーサーカーの真名をバラした。
聖杯戦争に参加するマスターにしては信じられない程の大ポカに、明かされた名に驚きを見せる士郎達、だがそれは大した問題ではないと言わんばかりのイリヤ、事実、その名を明かすデメリットなど無いも同然だった。
ヘラクレス。
ギリシャ神話に登場する英雄といえば?と聞かれてまず思い浮かぶのは彼、と言っても過言じゃない程の知名度を誇る大英雄。
オリンポスの主神ゼウスを父に持つ半人半神の存在で『十二の試練』で知られる冒険を始め、数多の怪物を打ち破った功績から、その生涯を終えた後は神となったと言われている。

その武勇伝は神話として広く知られ、後にヘラクレスオオカブトや同名のヒーロー等、高い戦闘能力を誇る存在にその名を冠せられる程にまでなった。
「まさか、ギリシャにその人ありと言われた英雄がバーサーカーとして立ちはだかるとは」
「左様、我ガ真ノ名ハ、ヘラクレス！数多ノ辛苦ヲ、越エシ我ガ身ニ、些細ナ攻撃等、通ジヌ！」
「そう、バーサーカーには並大抵の攻撃なんて通じないの。それこそ最上級の宝具を解放した攻撃でない限りはね」
「ま、マジかよ…！」
更に言えば、その『十二の試練』を始めとした様々な辛苦を乗り越えて来たヘラクレス、その最中に何かしらの呪いを掛けられたという失態も無かった事から、事実上突ける弱点も無い、という訳だ。
（今俺が持っている『悪戯好きの魔弾（フライクーゲル）』の、宝具としてのランクはC。それを、眼球を捉えたのに弾き飛ばしたんだ、イリヤ達の言葉は本当だろう。となれば、これではどうにも相手にならない。セイバー達に宝具を使わせるか？いや、ランクが分からない以上、どっちに転ぶか予想も付かないし、仮に上手く行っても後で不利になりかねない。そしたら、やるしか無い！）
「桜、耳を貸してくれ」
「は、はい」
そんな衝撃の事実を知らされた士郎達、その中で士郎は考えた末に、桜に何か耳打ちをする。
「だ、大丈夫なんですか？相手はバーサーカー、それも今言った様な途轍もない相手なんですよ…!?」
「大丈夫かどうかは後だ。今は、効く事を信じて突っ込むだけだ！」
その内容に驚き、引き留めようとする桜を他所に、士郎は居合の構えを取り、
「セイバー、バックステップだ！」
「え!?あ、はい！」
前線で戦っていたセイバーに後退を指示しながら、バーサーカーへ

と踏み込む！
「強化開始（トレース・オン）…！」
　その一歩目、右脚を踏み込むと同時に、両脚に魔力を流し込む、するとその両脚に回路らしき物が顕現、脚力が強化され、
「ム？何ヲ企ンデ」
「足元注意だ！『壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）』！」
「ヌォ!?小癪ナ！」
　士郎の指示通りにバックステップで後退したセイバーと、突っ込んで来る士郎の存在に気付いたバーサーカーが迎撃を仕掛けようとするのに対して、彼が踏んづけていた、先程弾かれた『悪戯好きの魔弾（フライクーゲル）』の幻想を破壊、地雷の如き爆発へと変えてその態勢を崩し、
「『終結すべき業火（レヴァンテイン）の』…！」
　二歩目、左脚を踏み込むと共に、愛用している刀の名を告げると同時に鯉口を切る、その動作によって響き渡る甲高い音、次の瞬間には、鞘から覗く刀身から、余りの高熱によって朱く染まった熱風が周囲へ吹き荒れる…！
「『剣（シュトルム）』！」
　そして三歩目、再度右脚を踏み込んだ瞬間、宝具としてのその力を解放しながら刀を抜き放ち、バーサーカーへと斬りつける！
　すると、刀身が纏っていた朱い熱風は真紅の炎へと変わり、奔流となってバーサーカーへと殺到する…！
「ヌ!?グァァァァァァ…!?」
「バーサーカー!?」
　流石のバーサーカーもこれは耐えられ無い様で、殺到した炎の奔流によってその巨躯が焼かれ、消し炭と化し、やがて勢いに負けてぼろぼろと崩れて行き、
「やったか。どうやらAクラス以上の、宝具の名を解放して放つ攻撃なら通じた様だな。ふう…」
　欠片も残さず吹き飛ばし、その命を消し去った。
　その一部始終を見届けた士郎は、今しがた振りかざした刀――彼の宝具『終結すべき業火の剣（レヴァンテイン・シュトルム）』を、血振るいの動作と共に納刀した。

が、
「まさかバーサーカーが、サーヴァントじゃない相手に７回も殺されるなんて…
でもまだ、勝負は終わっていないよ」
「な!?」
戦いはまだ終わってはいなかった。
消し炭となって散らばった筈のバーサーカー、だがその散った欠片達が１つ残らず、バーサーカーが立っていた場所へと集結していく。
「折角だから教えて上げるわ、バーサーカーの宝具を。バーサーカーの生前に幾度と無く降りかかった試練、それを潜り抜ける中で鍛え上げられた肉体その物が宝具なの。『十二の試練（ゴッド・ハンド）』、それがバーサーカーの宝具。１２回殺すまでは例え今みたいに肉体が消し飛んでも蘇り、そしてその類稀な技能故に一度受けた攻撃は跳ねのける、決して屈する事のない無敵の力よ！」
「そ、そんなの有りか!?」
「１２回もＡランク以上の宝具をぶち込めってのか!?」
「あり得ない…！」
「信じられません…！」
そんな信じられない光景に驚愕を隠せない士郎達、そんな彼らにイリヤが告げたバーサーカーの宝具が持つ効果、それによって更なる驚きが広がる中でも、バーサーカーの肉体は再構築が進んで行く。
「ヤルナ。我ガ命、７モ殺ストハ」
「くっ！」
そして蘇ったバーサーカーの姿に、再び刀を構える士郎。
しかしイリヤの言葉が本当であれば、同じ攻撃は通じない、となればどう対処するか、士郎達に緊迫が走る…！
「其処までですよ、バーサーカーのマスター」
「な、きゃぁ!?」
「オ嬢様!?」
だが、その緊迫は破られた。
何時の間にか離脱していたライダーがイリヤに肉薄して抱きかか

え、腕と脚で身動きを封じながら短剣を突きつけた、彼女は人質だとバーサーカーに見せ付ける様に。
「今すぐに撤退しなさい、バーサーカー及びマスターよ。さもなくば…」
言わずとも分かるでしょう。これは単なる脅しではありません」
「グヌヌ、卑怯ナ…!」
瞬時の動きでイリヤを人質にとったライダーは、撤退をバーサーカーに要求、出来ないならイリヤを殺すと見せつける様に脅迫を仕掛ける。
「バーサーカー、聞く事はな、い!?あぐ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…!?」
「オ、オ嬢様!?マ、待テ!」
「脅しでは無い、そう言った筈です。次は首を一突きですよ?」
それを無視してバーサーカーに攻撃を指示しようとしたイリヤ、だがそれが最後まで告げられる事は無かった。
聞き入れる気が無いと見たライダーが即座に左手を動かし、イリヤの右腕に短剣を突き刺し、更に其処から縦横無尽に動かしてズタズタに引き裂いた事で、余りの痛さに苦悶の声を我慢できず、更には気絶したからだ。
「ワ、分カッタ!撤退ショウ…!」
「物分かりが良くて助かります。彼女の事は頼みましたよ」
自らのマスターが命の危機に立たされている上に、それを切り抜ける為の礼呪行使も意識を失っている為に不可能とあっては選択の余地は無い、バーサーカーはライダーの要求に応じ、剣を下げ、殺気を引っ込ませ、ライダーからイリヤを受け取り、その場を後にした。
「少年。名ハ…?」
「え、俺?」
「左様」
去り際、バーサーカーは士郎に名を尋ねた。
尋ねられた士郎は一瞬、まさか自分とは思わなかったのもあって戸惑った様子を見せたが、
「士郎。衛宮士郎だ」

「士郎、カ…
人ノ身デアリナガラ、我ヲ7回モ、殺シテ見セタ戦士ヨ、マタ会オウ」
正直に答え、それを受け取ったバーサーカーは満足げに去って行った。

1日目―9

「何を考えているんですかシロウ。サーヴァント、それも私と互角以上の力を持ったバーサーカー相手に、マスターである貴方が突撃するなんて。ライダーが介入したから良かったものの…」
「まさかマスターである貴方が前線に躍り出るとは思いもよりませんでした。桜から念話でバーサーカーのマスターを人質に取る様に指示が来た時は、何かバーサーカーに打つ手があるのか、とは思っていましたが…」
「悪い、セイバー、ライダー。始まって早々にセイバー達の宝具を使わせる訳には行かないし、レヴァンテインならバーサーカーをも倒せる、なんて思ってさ。まさか死んでも蘇生するとは考えていなかった、軽率だったな…」
「流石に今回は俺も擁護出来ねぇぞ、士郎。レヴァンテインがどれだけすげぇ宝具かは重々理解しているが、それも絶対じゃねぇ。今回みたいに凌がれる事もあるんだ。もしお前が殺されたりしたら…」
「士郎だけの命じゃないんだから、士郎が殺されたら、私…!」
「本当にごめん、天音、零、皆。今度から気を付けるよ」
イリヤと、彼女のサーヴァントであるバーサーカーの襲撃を何とか退けた士郎達、屋敷に戻って早々に始まったのは、バーサーカーに突撃するという無茶を仕出かした士郎への追及であった。
それも当然であろう、聖杯戦争においてマスターの存在は重大、魔力供給等からサーヴァントを現界させるのにはマスターの存在が欠かせないのだ、よってマスターが倒されれば契約しているサーヴァントがどうなるかは言うまでもない、それはマスターとしての役割を図らずも分割出来た士郎と天音も例外ではないかも知れない。
それを抜きにしても天音達にとって士郎はかけがえのない大切な存在、その士郎が殺されたかも知れないのだ、それが実際に成されてしまった時の事が頭を過ぎる、その恐怖は計り知れない物であろう。
士郎も自分がどれだけ軽率な行動をしていたか、もし一歩間違えればどんな事態になっていたか、そしてそれによって自分の大事な存在

がどうなってしまうか、それを理解していた為、素直に謝罪していた。
「それにしても士郎。そのレヴァンテインという宝具と思しき刀ですが、それもまた『作った』のですか？バーサーカーを7回も殺したらしきあの灼熱、私の宝具と同等クラスの力を感じましたが…」
「確かに、あの灼熱は凄まじい物でした。あのバーサーカーをも呑み込んだあの宝具の力、人ひとりの力でそう作れる代物ではない筈、いやそもそも宝具を『作れる』事自体が想像を絶する事ですが…」
謝罪する士郎の心から反省する様子を感じられた事でその追及は終わり、次はバーサーカーをも殺して見せた士郎愛用の刀レヴァンテインについて、引いては士郎の魔術師としての在り様についてだった。
宝具とは人々が抱く幻想が武装と化した物、主にサーヴァント達自身や、生前持っていた武器に関する伝説が具現化した物、セイバーの言う通り、一介の魔術師が簡単に作れるものではないのだ。
が、士郎はそれを作れ、実際に自ら作った『悪戯好きの魔弾（フラィクーゲル）』を実戦で何度も使って来た、更にレヴァンテインでバーサーカーをも（蘇生こそされたが）殺して見せた。
士郎がどれだけ特殊な魔術師であるか、それは言うまでも無いだろうし、気になるのは必定という物だ。
「まあ気になるよな、そりゃあ。1つ補足したいんだけどさ、実を言うと俺が『作って』いる宝具は厳密に言えば宝具『その物』じゃないんだ」
「宝具『その物』じゃ、無い…？」
「ああ。宝具の外観、基本構造、骨子、纏わる伝承、内包されし力…
それらを脳内で思い描いて再現した物、言うなれば『贋作（レプリカ）』だな。俺はそんな宝具の贋作を作る事に特化した『贋作者（フェイカー）』なんだ。使える魔術も『解析』に『強化』に『変化』、そして実際に宝具を作り出す『投影』くらいしかない。尤も、どれも普通のそれじゃないけど」
士郎が挙げた魔術、それは投影を除けば初歩と言って良い物、投影も折角成功しても普通は直ぐに消失して、結局は無駄に終わってしまう事から、普通の魔術師なら使わない物だ。

尤も、士郎曰く『贋作』とは言えど宝具を投影できる時点で普通じゃ無いが。
「そんな俺がただ1つ手にした宝具の『その物(オリジナル)』…
贋作者としての俺の在り方に気付き、歩み続けた事で手にした、1つの答え…
それがこのレヴァンテインなんだ」
「成る程、名前からして北欧にて神々の黄昏が起こりし時に振るわれるあの剣を思い起こさせましたが、名前が似ていただけの、別物の様ですね」
「それにしても、その年であれ程の力を有するレヴァンテインを手にする域にまで至るとは、やはり凄いですね、シロウは…」
そんな普通ではない自らの在り方に気付き、それを極める事…
それは決して楽な道のりではない筈だ、けれどもそんな道を歩み続けた事で得た『宝具(答え)』であるレヴァンテイン、それを掲げる士郎の顔には、何処か誇らしげだった。
「凄いですね、お義兄さん。人とは違った自らの可能性に早くから気付いて、どんなに苦しくても前を向いて歩く、その末に掴んだレヴァンテインを手に、あのバーサーカー相手にも立ち向かっていった…
本当に、凄いです。それに先輩もお義姉さんも、お義兄さんを守るためにサーヴァント相手に奮闘していたって聞きました。あの時、何も出来なかった私とは大違いです…」
「そんな事無いぞ、桜。あの時桜は、危険を賭して俺達を助けに来てくれた。その来てくれた桜が、ライダーの真名を態々明かすなんて事をしてまで、聖杯戦争に関して色々教えてくれたから、俺は本当の意味で、聖杯戦争に臨む事が出来た、聖杯戦争に加わる決意が出来たんだ。もし桜から話を聞いていなかったら、多分考え無しに行動していて、本当に殺されていたかも知れない」
そんな士郎の、更には零や天音の奮闘ぶりを見聞きしていた桜は、一方で何も出来なかった自分を恥じる様な言葉を呟いていたが、士郎はそう思っていなかった。
「そういえば、サクラ。士郎が言った様に、先程から聖杯戦争に関して

大まかながら分かりやすい説明をしていたり、ライダーの真名を態々明かしたり、何故其処までの事を?幾らシロウ達にとって家族の様な存在と言えど別々のサーヴァントを持ったマスター同士、もしもの事もあるでしょうに」

桜という存在がいたが故、桜の行動があったが故に、ある意味で士郎の命があると言っても良い現状、一方でセイバーはライダーのマスターでもある桜の今までの行動に、当初から気になっていた疑問を呈していた。

そんなセイバーの、桜を疑うというあんまりな言動に士郎達は渋い顔を浮かべていたが、サーヴァントである彼女が疑問を呈すのも仕方ない事なので苦言を挟む事は無かった。

「そうですよね、セイバーさん。普通ならそう考えるでしょう。でも私には先輩達を疑う事は、裏切る事は出来ませんから。先輩達には返し切れない恩があるのに、そんな事したら、罰があたっちゃいます」

そんなセイバーの様子も当然だと、気分を悪くする事無くその疑問に応じる桜、彼女から語られた事実は、士郎達を驚愕させた…

「衛宮士郎、か…

よもやあのセイバーを従えて参戦するとは、これもまた必然、か。それにしても、雑種の身でありながら終末の業火を掴み取り、我が物として見せるとは、面白い奴だ。この世もまだ捨てた物ではない、という事か?1度会うてみたい物だな、セイバーからの答えも聞かず仕舞いだったからな、丁度良い」

同じ頃、とある場所で、1人の男が何処か興味深げに、そう呟いていた。

２日目『暗躍』

２日目――１

「あの夢は、セイバーが人として生きていた頃の…？」

士郎達が聖杯戦争に参加する決意を固めた翌朝、彼は先程まで見ていた夢の内容を反芻していた。

其処に出て来た何処かの国を束ねる王らしき存在であるセイバーの、引き抜いた者は王となると言われていた剣を引き抜き、己の師である魔法使いや、自らの近臣である１２人の騎士と共に数多の敵を討ち払い、誰からも敬われる名君として慕われていたが、やがて自らの妻と騎士の１人との不義と出奔、自らの息子だとする騎士の謀反等が重なって統治していた国は滅び、幕を閉じたその生涯を。

その中で出て来たセイバーが手にしていた剣、その骨子や基本構造、在り方が自然と頭に入って来て、それがどんな宝具であるか、それを使っていたセイバーがどんな存在かが理解出来た。

「投影開始（トレース・オン）、うぉ!?

ま、眩しい!?何なんだ、この剣は!?」

ふと、その剣を作ってみようと投影した士郎、その時、出来た剣が放つ余りに眩しい光に、士郎は怯み、

「ん、んぅ…!?

な、何、眩しいんだけど…！」

「あ、ご、ごめん天音！装填開始（ロード・オン）！」

熟睡していた天音もその眩しさに目が覚めた。

予想外の方面からたたき起こされた事で何とも不機嫌な寝起きとなった彼女の様子に申し訳なさを覚えた士郎は、慌てて詠唱を行う。

すると今しがた士郎が投影した、黄金色に輝く剣が放っていた光は収まり、形を変え、士郎達が愛用する７．６２×５１ｍｍＮａｔｏ弾へと変貌した、尤もその光輝くかの様なオーラまでは封じ切れていなかったが。

「それって、セイバーの…？」

「天音も見たのか、生前のセイバーが歩んだ道を？ああ、これはあの夢、セイバーの記憶で出て来た『選定の剣』ことと『勝利すべき黄金の剣』。そして其処から導き出されるセイバーの真名は…」

「今のイギリス、ブリテンのアーサー王…

あの無茶苦茶なステータスも納得だけど、まさか女の子だとは思わなかった…」

その弾丸、それに変貌する前の剣を見ていた天音と士郎は、寝ていた間に見ていたセイバーの記憶とも照らし合わせ、其処から彼女の正体を割り出した。

アーサー王。

嘗てブリテンと呼ばれていたイギリスの地における伝説の王で、選定の剣を抜いて王となってからの波乱万丈な人生と、勝利を齎すと言われる聖剣エクスカリバー、円卓の騎士として語られる12人の近臣達との絆、聖杯探求、そして自らの最期となったカムランの戦いで知られる息子モードレッドとの戦い、といった逸話等で有名な存在だ。

日本においても遊戯王OCGでは円卓の騎士をモチーフとした【X―セイバー】や【聖騎士】、彼らが使っていた剣をモチーフとした【聖剣】等といったカードカテゴリに、エクスカリバーの名を冠したエクシーズモンスターが登場している他、様々なゲームや漫画のモデルにもなる等からも、その有名振りが分かるだろう。

サーヴァントのステータスは知名度によって補正が掛かる事から、あの膨大なステータスも納得である。

「何で俺の元にあのアーサー王がサーヴァントとして呼ばれたかは分からない。関係する触媒なんかこの家にある筈も無いし、セイバーが俺達に関するそれを持っている訳がない。性質なんてどこからどう見ても違うし。というか伝承では男性の筈だったけど、実際に呼ばれたセイバーは女の子だよな？でも経緯がどうあれ、あのバーサーカーにも引けを取らない強さと、夢に出て来た剣を元に投影したこの『勝利すべき黄金の剣』からして、彼女は間違いなくアーサー王、これから聖杯戦争を戦う上で彼女の存在は凄く心強い。俺は、いや俺達

は、この聖杯戦争をいち早く終わらせて見せる…！」
「うん、士郎、絶対に、絶対に終わらせよう…！」
　これ程までの存在が自らのサーヴァントとして加わってくれる、その事実に心強さを覚えた士郎と天音、改めて聖杯戦争を終わらせるという決意をし、相変わらず激しく愛し合った後の散乱された部屋を着替えながら片付け、零達が待っている居間へと向かった…

「さて、時間も無いから手短にしよう。最初に各陣営の情報から。まずセイバーとライダー、この２人は俺達の陣営。バーサーカーはあのイリヤスフィールと言う少女の陣営だ。真名はヘラクレスで、所有する宝具の関係でそうそう倒れたりしない難敵だ。あと、クラス名は分からなかったけど、赤い外套を着たサーヴァントを遠坂が従えていたのを、昨日見た。ランサーが何処の陣営かは不明だけど、少なくとも遠坂の陣営と敵対している事は明白。アサシンとキャスター、アーチャーは所在不明。恐らくその３クラスの内１つがあの赤い外套のサーヴァントのクラスだと思われる。此処までは良いか？」
　その後、何時もの様に様子伺い（という名のただ飯）に来た藤ねぇが学校へと向かった（尚、霊体化出来ないセイバーに関してどうするかは、桜が魔術による暗示をかけた事で解決した）のを見て、士郎、天音、零、桜、セイバー、そしてライダーの６人はテーブルを囲み、作戦会議を始めた。
　最初に口を開いたのは士郎、といってもこれまでの戦いで得た情報の確認で、それを聞いた残る５人は、士郎の問い掛けに頷いた。
「昨日繰り広げられた交戦は３つ。１つ目は学校にて行われたランサーと赤い外套のサーヴァントとの決闘。２つ目はそれを目撃していた俺を抹殺する為のランサーによる襲撃。３つ目は俺達とバーサーカーとの戦い。この内１つ目、いや２つ目の交戦によって、少なくとも遠坂は学校にマスターがいると踏んだ筈だ、何しろ銃声１発に炸裂音、そして恐らくそれらを食らってフラフラだったランサーの様子を見聞きしただろうから」
「『他者封印・鮮血神殿（ブラッドフォート・アンドロメダ）』のダミーを設置したのも功を奏しましたね、

桜。あれに桜の姉達や、ランサーが釣られたと言っても過言ではない、囮としては十分な働きです」
「ああ、何か違和感があるなと思ったら、それだったのか。まあ危なくない感じだったからスルーしていたけど」
　そんな中でライダーが自らの宝具、そのダミーを学校に設置していたとの報告をさらりとしていた。
他者封印・鮮血神殿（ブラッドフォート・アンドロメダ）。
　ライダー達ゴルゴーン3姉妹が生前追放された『形のない島』に作られた神殿を由来とした結界状の対軍宝具で、訪れた者を石に変えつつ貪り食ったという逸話をベースに、展開した結界の中にいる生命を血液状に変えて吸い取ってしまうという凶悪な物、とはライダーの説明。
　そんなえげつないという言葉に尽きる宝具を、然しながら今回ライダー達は、それそっくりな気配を出しながらも実際の効果は無いダミーとして学校に設置したのだ、その（本来の）危険性を察知した敵陣営が妨害の為に動くのを見越した囮として。
「ライダーから耳よりの情報を得た所で、再確認だ。その結界の囮、そして響いた銃声を踏まえ、遠坂は恐らく、学校にいる自分以外のマスターが誰かを調査する筈だ。其処で桜、今日は学校を休んで、間桐の家から荷物を取って来てくれ」
「は、はい、分かりました」
「零も今日は休んで一緒に行ってくれ、流石にサーヴァントであるライダーがいると言っても、女性2人に荷物を運ばせる訳には行かないし、さ」
「良いのか、士郎？俺なんかが桜の家に行って。流石に女の子の家に俺が押し入るってのは…」
「いやいや、零だから良いんだよ。お前ならカモフラージュにうってつけだし、桜にとっても、な？」
「は？どういう事だ、言ってる意味が分かんねぇぞ？」
　そんな如何にも見つけられるかな？と言わんばかりの情報に食いつかない筈がない、虱潰しにでも探し出す存在が現れるかも知れない

と判断した士郎は、桜に学校に来ない事、荷物を取りに来させる事を命じた。
　その際零に同行を指示した際、その理由が全く以て見当が付かないと言いたげな零の様子に、士郎と天音は、ため息をつきながらジト目で零を見ていた、この朴念仁、というメッセージを込めて。
「と、ともかく、次にセイバーは、此処で天音を守っていてくれ」
「了解しましたが、シロウはどうするのですか？」
「俺は学校へ行く」
「な、正気ですか？今シロウが言った様に、サクラの姉である魔術師（メイガス）がその学校にいるマスターを探し出す筈、其処にマスターである貴方がノコノコと出る等、正気とは思えない。そうでなくとも今は聖杯戦争の真っ只中、サーヴァントも付けずに1人で外を出歩くなんて真似は控えるべきだ」
　そんな未だに疑問符を浮かべている零は一先ず置いて、セイバーに天音の護衛を命じたが、其処で自分はどうするのかと問われた士郎が返した答えに、セイバーは苦言を呈した。
　が、
「それは分かっているさ、セイバー。昨日ランサーやバーサーカーと戦って、これは文字通りの戦争なんだと、隙を見せれば殺されるんだと、思い知らされた。幾らサーヴァント相手にも対抗手段を有している俺であっても、それは変わらない。だけど今日ここで零と一緒に学校を休んでみろ。此処で如何にも非日常に足を踏み入れました、と言わんばかりの対応をしてみろ。言うまでも無く俺がマスターですって敵に知らせる様な物じゃないか。虎穴に入らずんば虎子を得ず、有名な諺だ」
「そ、それはそうですが…」
　それ故に士郎は平日である今日は学校へ行くと、変わらぬ日常を過ごす事が大事であると突っぱねた。
「それに学校は一般人も多いし、そんな中で大々的に戦いを仕掛ける輩もそういないだろう。念のために銃と宝具は幾つか持って行くし、いざとなれば令呪でセイバーを呼ぶから、さ」

尚も案じるセイバーだったが、士郎が羽織っていた黒のロングコートに入れていた武器の数々を見せながら説明した事で、やっと納得した様子だ。
「じゃあ、行ってきます」
「行ってら、士郎…」
「おう士郎、こっちの方は任せてくれ」
「気を付けて下さいね、お義兄さん」
そして士郎は、皆に見送られながら、学校へと向かった…！

2日目―2

《予想通りだ、天音、セイバー。遠坂は虱潰しに、誰がマスターかを探している。まさかもう直ぐバレンタインデーなのにかこつけて、義理チョコを1人1人に配って来るとは思わなかったけどさ》

《成る程、それで素手などを差し出した際に令呪が刻まれているか、或いはその魔力を感知できるかを確認する、という算段ですか。手間はかかれど確実な手だ。大丈夫そうですか、シロウ?》

《大丈夫だ、問題ない。そう来ると読んで、左手に『仕込み』はしてあるし》

《そういえば士郎への本命チョコ、今年は何にしよう…》

学校へと到着した士郎を待っていたのは、袋一杯に詰められたチョコを1つ1つ、通りかかった人達に配っているというツインテールな同級生の少女――遠坂凛(とおさかりん)の姿であった。

昨夜に彼女のサーヴァントと共にいた所を目撃し、その場で銃声や炸裂音を響かせた士郎にとっては、その予想通りと言いたげな姿に思わず苦笑いが浮かびかけるも堪え、怪しまれないように彼女からチョコを素直に受け取った。

その際にちらちらと士郎の素肌が露出するであろう場所を気にしていた様だが、今の士郎は黒のロングコートを羽織り、両手には黒の手袋を付けた防寒態勢、そんなタイミングは無かった(尤も令呪が刻まれた左手は手袋で隠されているため、令呪を目視出来る筈も無いのだが)。

ならばと令呪から感じられる魔力の気配を探ろうとしていた様だが、それも士郎から感じられなかったらしい為に、何事もなく受け流された。

無論それは士郎による左手の『仕込み』の恩恵、それが恐らく上手く行ったであろう事を念話で、天音達に伝えていた。

《尤も、これで俺がマスターでは無い、と思わせたと判断するのは早計だな。引き続き警戒しておくよ》

《ええ、それが宜しいでしょう。其処に設置されているのがダミーと

はいえライダーの宝具は凶悪その物、それが未だ健在な以上、先方の警戒心は凄まじい物があると思われますから》
《ベースはちょっとビター気味が良いかな…？》
《あの、アマネ？先程からどうしたのですか？》
《天音、バレンタインの事を気にしてくれるのは嬉しいけどさ、念話を切ってから考えよう、な？考えている事が駄々漏れだから》
《はっ!?私ったら何を…》
　その際にバレンタインデーが近い事を、天音が聖杯戦争そっちのけで気にしていたが…
　自分の事を此処まで想ってくれる事に嬉しさを覚えながらも、流石に念話の真っ最中に考える事かと少しばかり呆れた士郎のツッコミによってやっと、天音は我に返った。
《ともかく、引き続き天音達は家で待機してくれ。いざとなればセイバーを令呪で呼ぶ》
《了解ですが気を付けて下さい、シロウ。少しでも危機感を覚えたら私を呼ぶよう、お願いします》
《セイバーの言う通りだよ、士郎…》
　天音とセイバー、２人の己を気遣う言葉を最後に念話は切断され、士郎は何時もの教室へと向かった。

「ちょっと遅くなっちゃったな。遠坂もそろそろ動く頃かも知れないな…」
　それから時は流れて放課後、さっさと帰ろうとしたが顔なじみである生徒会長からの「ちょっとした」頼み事をつい引き受けてしまい、それで思いのほか時間を潰されてしまった士郎、もう凛が動き出しているかも知れないと気を引き締めながら、家路につこうとした。
　其処へ、
「あら、衛宮君？どうしたの、皆もう帰った中でまだ学校にいて」
　当の凛が、士郎へと声をかけて来た。
「遠坂？ああ、ちょっと一成から頼まれ事があってさ、それで思いのほか時間を食っちゃったんだ。遠坂はどうしたんだ？」

突如の接触、しかし予想出来ていた事もあって平静を保ちながら、凛の問い掛けに応じた。
「ちょっと私も用事があってね。それにしても、おかしいと思わない？今は終わりのチャイムが鳴ってからほんの数十分、でも学校には私と貴方以外いないのよ？」
「そうなのか？」
（まさか…！）
が、其処でふと凛が言った言葉に、士郎は警戒心を引き上げながらも、平静を装って聞き返す。
「ええ。だって…
私がそうしたのだから！」
その瞬間に凛の様子が、それまで柔和な様子で接していた凛の雰囲気が、一転した…！
「間違いだとしたら謝るわ、尤も覚えていないでしょうけど…！
Ａｎｆａｎｇ（セット）…！」
目つきを鋭くし、敵意をむき出しにした凛の様子にも（表向きは）平静を崩さない士郎、そんな彼の様子など目もくれずに凛は左腕を構える、すると魔術回路を起動したと思われる詠唱と共に緑色に輝き出し、
（来るか…！）
指を士郎に向けて指すと共に、何かが凝縮され、それは漆黒の弾丸と化した。
それは寸分の狂いも無く士郎へと一直線へ飛び、
「『八咫鏡（アマテラス・ミラー）』！」
「うぐっ!?あ、あぁ、うぁ…！」
直撃した、発射した凛の腹部へと。
「まさか、俺なんかに目星を付けて来るとは思わなかったな。俺が聖杯戦争に参加しているマスターだと分からない様、仕込みはしていた筈なんだがな…」

「うぐ、あ、や、やっぱり、貴方が、マスター……！」
自らが士郎へ向けて放った筈の、漆黒の魔弾が何故か自分に帰って来て、腹部に直撃した事による衝撃で崩れ落ち、立ち上がるどころか首を動かすのすらやっとな状態に陥った凛、それでも尚失っていない戦意の表れか、折角の『仕込み』も空しく目を付けられた事への疑問を口にする士郎に顔を向け、呻きながらもそう呟いていた。
「どうやら最初から俺がそうだとヤマはっていた様だな、驚いたよ。だが、俺の実力も図らずに突進とは感心しないな。だからそうやって蹲る事になる」
そんな凛への、というよりまだ姿を見せぬ凛のサーヴァントへの警戒を怠る事無く、士郎は周囲を警戒しながらコートの内側に入れていた銃と、それ用のマガジンを取り出して装填、スライドを引き、セレクターレバーをセミオートに設定、何時でも発射出来る状態にした。
「じゅ、銃!?ま、まさか、昨日の、あれは……！」
「やっぱり昨日の夜、ランサーと戦いっていた赤い外套の男が遠坂のサーヴァントだったのか。ああ、銃声が響くから迂闊に撃てないだろう、なんて考えはしない方が良いぜ。コイツは特殊任務部隊向けカービンライフル『９Ａ―９１』、銃声なんて無縁の物、精々カメラのシャッター音位の作動音がする程度だ」
９Ａ―９１。
ソ連が健在だった頃に存在したデジニトクマッシ設計局が開発した、特殊部隊向けのアサルトカービンライフルである。
その特徴は何といってもサプレッサーの使用を前提として作られた９×３９ｍｍ弾を使用している事、亜音速で発射される事から衝撃波（ソニックブーム）が発生しない為にサプレッサーとの相性は抜群、それでいて低い弾速を補う為に弾頭重量を重くして威力を高めた事で、今士郎が言った通り「カメラのシャッター音」程度の作動音しか鳴らない隠匿保持性を持ちながら、アサルトライフルに使われている中間弾薬に迫る程の威力を両立しているのだ。
そんな９×３９ｍｍ弾を使用しているのは何も９Ａ―９１に限った話では無いが、その中でも９Ａ―９１は図抜けてコンパクトで、全

世界に存在するアサルトカービンは勿論の事、サブマシンガンやＰＤＷ(個人防衛火器)と比較しても小さい方で、今の士郎みたいにコートの中に入れても違和感を覚えさせない位だ。
正に特殊部隊の任務に最適と言って良い、コンパクトウェポンである。
「さて、大人しくさえしていれば、命までは取ら…！」
それはともかく、凛が突っ伏し、自らはノーダメージで９Ａ―９１を構えている、そんな絶対的優位に立っている士郎が、警告と共に銃口を凛に向けようとした瞬間、何かを察知した彼がその場を飛び退いた。
次の瞬間には風切り音と共に、さっきまで士郎が立っていた場所を何かが通り過ぎ、それは凛を庇うかの様な場所へと止まった。
「無事か、凛？何やら窮地に立たされている様だが」
「う、うるさいわね、アーチャー、ちょっと、油断した、だけよ…！」
それは言うまでも無く、赤い外套を羽織った凛のサーヴァント――アーチャーだった。

2日目―3

「ソイツが遠坂のサーヴァントか。まさかアーチャーだとは思わなかったな」

突如として士郎の前に立ちはだかったアーチャーの姿にそう言いながら、士郎はアーチャーのステータスを確認する。

【クラス】弓兵（アーチャー）

【属性】中立・中庸

【ステータス】筋力…C　耐久…C　敏捷…C　魔力…B　幸運…D

宝具…？

（なんて言うか、可もなく不可も無くって感じのステータスだな。セイバーやバーサーカーは兎も角、ライダーと比べても耐久と幸運が1ランク程勝っているだけ、というか宝具のランク不明って、一体どんな宝具を持ったらそうなるんだ？だが昨日のランサーとの決闘で互角に渡り合ったんだ、ステータスの凡庸さを補う技量はある筈）

「ええ、そうよ…

見た所、近くに、貴方の、サーヴァントは、いない…

これで、形勢逆転、ね…！」

その一見すると凡庸と言えるステータスに、それでいて昨日ランサーと渡り合ったあの姿に、どれ程の技量を持っているのかと考える士郎に対し、圧倒的不利から一転して優位に立った事から得意げな様子を隠そうともしない凛、尤も先程の攻撃によるダメージが大きすぎたが故に未だうずくまったままで、喋りも途切れ途切れではある。

が、

「それはどうかな？確かにサーヴァントと人間では圧倒的と言っても良い戦力差があるのは確かだ。だが、未だに蹲ったまま立ち直れない遠坂を庇いながらの戦いになるソイツと、特にそんな物を気にする事無く戦える俺、どちらが有利かは言わなくても分かる筈だ。覚えているだろう、昨日俺がランサーの片目を吹っ飛ばした事を、サーヴァント相手にも一矢報いられる俺の実力を」

士郎は警戒こそすれど、負ける気は無いと言わんばかりにそう言い

放つ。
　まるでサーヴァントをも倒せると言わんばかりの自信、それを生み出しているのはやはり、前以て投影して来た宝具の数々であろう。
　９Ａ―９１の弾丸である９×３９ｍｍ弾型に作られた愛用の『悪戯好きの魔弾（フライ クーゲル）』に、唯一の『その物（オリジナル）』であるレヴァンテイン、そして…
　更には先程の攻撃が自らに返って来た事によるダメージで昏倒したままの凛、彼女の様子からして立ち直るにはかなりの時間を要する筈、アーチャーはそれを庇いながら戦わなければならない…
　これらの状況を鑑みればサーヴァント相手に無力化させる事も不可能ではないし、厳しければセイバーを令呪で呼べばいい、それ位の時間は容易に稼げる、士郎はそう考えていた。
「私も甘く見られたものだな。貴様の攻撃から凛を庇いつつ戦う等、造作でもない」
「舐めるなよアーチャー。この９Ａ―９１は狙った獲物を必ず撃ち抜く。例え射線上に獲物がいなくても、障害物があったとしてもだ。知っているか？スキルか或いは宝具か、どういう理屈かは知らないが、ランサーには飛び道具が通じないらしい。それが通ったって事は、分かるだろ？」
「ならば、使われる前に貴様を倒すまでだ！」
　そんな士郎の思い通りにはさせない、そう言わんばかりにアーチャーは何処からともなく手にした黒と白の短剣を手に、猛スピードで士郎へと飛びかかる。
　ランサー達と比べればまだ士郎も対応できる程度ではあるが、それでも一瞬の内に密着戦に持ち込む事は不可能ではない、士郎が９Ａ―９１の銃口を向ける暇も無く、２振りの短剣が士郎へと一閃され、
「『八咫鏡（アマテラス・ミラー）』！」
「ぐうっ！せいやっ！」
　斬り裂いた、何故か短剣を振るっていた筈の、アーチャー自身の両

腕を。
だがそれはアーチャーにとって想定していた事態の様で、それにも怯む事無く、足払いの要領で士郎へとキックを飛ばした。
その直前アーチャーの眼は捉えていた、２振りの短剣が士郎の身を切り裂く寸前、自分と士郎の間に立ちはだかる様に、鏡面の様な円形の障壁が立ちはだかり、自らの短剣を跳ね返した事、その障壁は、士郎の足元まではカバーしていない事を…！
故にアーチャーは短剣が跳ね返される瞬間に手放し、それが自らの両腕を斬り裂くのも構わずに態勢を低くし、障壁の向こう側にいる士郎へと攻撃を繰り出す…！
「なっ!?」
「『悪戯好きの魔弾（フライクーゲル）』だ！喰らえ！」
「ぐ、が、あぐ、っ!?」
「あ、アーチャー…!?」
が、其処に士郎はおらず、キックは空を切った。
いや実際には『いた』のだが、アーチャーの行動を先読みしていたかの様にバックステップし、キックを回避していたのだ。
更に士郎は、自らの回避によって生じたアーチャーの僅かな隙を逃さず、９Ａ—９１の銃口をアーチャーへと向け、愛用している宝具の名を唱え、何発か発砲した。
カシャカシャ、という「カメラのシャッター音」の様な作動音のみを鳴らしながら連射された９×３９ｍｍ弾は、それらが持つ必中の呪いも相まって、一発のかすりすらも無くアーチャーの四肢を貫き、抉った。
「チェックメイトだ、アーチャー。俺の『仕込み』を見破ったのは流石と言うべきだが、だからこそアンタがどう動くかは何となく読めていた。人間の実力を甘く見るからそうやって不覚を取るんだ」
「ぐ、がは、どうやら、そうらしいな…！」
「あ、アーチャー、こ、こんな、馬鹿な、事が…！」
２対１、しかも２人側のうちの１人はサーヴァントという圧倒的な状況にも関わらず、ほんの少しのダメージを負う事無く２人共に無力

化して見せた士郎、勿論今しがた士郎が言った様に彼を甘く見ていた事による油断があっただろうが、自分自身は兎も角サーヴァントであるアーチャーはそれだけで不覚を取られる様な存在ではない、そんな考えゆえに凛は今の状況が信じられなかった。
「残念ながら遠坂、現実は非情だ。現実は小説よりも奇なり、とはよく言った物だな。さて、『貪り食う呪紐(グレイプニル)』。大人しくして貰うぞ、遠坂」
「ぐっ!?」
「がぁ…!」
　然しながら彼女が信じようと信じまいと、これは現実に起こった事だと士郎は言い放ち、コートの中に入れていた紐状の宝具――『貪り食う呪紐(グレイプニル)』の名を告げ、それ自身に、凛とアーチャーを後ろ手に拘束させた。
『貪り食う呪紐(グレイプニル)』。
　北欧神話に登場する魔法の紐で、神々に災いを齎すとされた怪物フェンリルを拘束する為、ドワーフ達によって作られ、アース神族の一角である軍神テュールによってその役目は果たされた。
　その際、材料として使われた6つの材料（猫の足音、女の顎鬚、山の根元、熊の健、魚の吐息、鳥の唾液）はこの世に存在しなくなったり、その役目を担ったテュールが右手をフェンリルに食いちぎられた事で隻腕となったり、テュールのその功績から火曜日(Tuesday)の語源になったりといった逸話もある。
　士郎が投影したそれもまた強烈な拘束力を有しており、凛は勿論の事、サーヴァントであるアーチャーも解けそうになかった。
「さて、まあこんな状況になって今更だが、一先ず話がしたい。俺の家に来てもらおう、丁度アンタに会わせたい人もいるし」

2日目―4

「此処が、俺の家だ。まあ色々聞きたい事はあるだろうけど、まずは入ってくれ」

校内での凛とアーチャーの主従との戦闘で圧勝し、彼女達を拘束した士郎は「話がしたいし、会わせたい人もいる」として自らの屋敷へと連れて来た。

その際、彼女は士郎を警戒してか何処か渋った様子で、道中も表情は固く、終始無言であった。

それも当然と言える、衛宮家の屋敷もそうだが、魔術師の本拠地には基本、結界等の仕掛けが施されている物、其処に他の魔術師を招き入れるという事は「怪しい動きをしたら仕掛けを作動させる」という意思表示であり、其処での交渉は即ち自らを優位に立たせての物、というか脅迫に等しい物である、今回の様に成す術も無く敗北したり、抵抗できない状態にされたり、或いはそんな仕掛けにも対処できると言えるほど自らの実力に自信を持っていない限り、士郎の要求に応じる筈も無い。

そうは言っても士郎に従う他無い凛、警戒心を隠そうともせず、だが素直に、案内に応じ入って行くが、

(な、何なのこの高度な結界…!?

『御三家』のウチより格上で、私が入るまで気付かせないとか、どんだけ出鱈目なのよ…!

今までこれ程の結界が張ってある家を見逃していたなんて…!)

そんな警戒に満ちた表情は、敷地内に入った瞬間に驚愕へと変貌した、主に張られていた結界の凄さに。

「セイバー、今帰ったぞ」

「お帰りなさい、シロウ。彼女が例の魔術師(メイガス)、遠坂凛ですか。それにアーチャーと思しき、彼女のサーヴァントまで拘束して…

結果を見れば流石シロウと言うべきでしょうが、やはりマスターとして好ましい対応とは思えない。貴方も分かっているでしょう、幾らサーヴァントをも倒せる力があっても、絶対は無い、と」

「勿論分かっているさ。さっきもヤバくなった時の為に令呪でセイバーを呼ぶ準備はしていたし」
「なら良いですが…」
「せ、セイバー!?まさか衛宮君、貴方が最優のクラスを引き当てたというの、というかオールA!?何なのこの馬鹿げているにも程があるステータスは!?さっきの戦闘でアーチャーを圧倒して見せた衛宮君自身といい、一体全体どうなっているの…!」
だが、帰宅した士郎を迎えに来たサーヴァントの少女――セイバーが属するクラスに、いやそれよりもマスターとしての能力で閲覧した、彼女のステータスが余りにも強大な事に凛は更に驚き、先程自らのサーヴァントをも圧倒して見せた士郎の底知れぬ実力もあって混乱に陥っていた。

「落ち着いたか、遠坂？付いて来てもらってあれだが、まだ会わせたい存在が戻ってない様だし、折角だから俺達の話し合いを済ませよう」
「わ、分かったわ…
さっきまで驚いて我を忘れていたけど、色々と聞かなきゃいけない事が出来たし…」
余りの事態に混乱状態になっていた凛を何とか屋敷へと招き入れた士郎、その後何とか立ち直った凛とアーチャー、士郎とセイバーが居間で対面する形で、話し合いは神妙な雰囲気の中始まった。
尚、この場にセイバーのもう1人のマスターである天音はいない、本人が面倒くさがったのも一因ではあるが、セイバーの(表向きの)マスターは士郎1人のみとして通っている、友好的な関係とは『まだ』言えない凛達相手に、態々そのアドバンテージを放りだす様な真似はしないという士郎の考えからだ。
「そっちから仕掛けて来たとはいえ、さっきは縛り上げて無理矢理連れ込む様な真似をして悪かった。詫びと言っては何だが、そっちから聞いても良いぜ。答えられる限りの事は話そう」
「あら、良いの？じゃあ遠慮なく聞かせて貰うわ、冬木の管理者(セカンドオーナー)として、貴方には聞いておかなきゃならない事が山ほどあるし」

その冒頭、先の戦いで圧勝したにも関わらず下手に出る様な対応を取る士郎にセイバーが何か言いたげではあったものの、相手が相手だった事もあってか口を挟む事無く、
「じゃあまずは、どうやって今までこの冬木に潜んでいたかを聞かせて貰うわ。１０年位前から何の報告も無く、そして気配を悟られる事も無くこの地に隠れられたその理由を…」
凛は己が抱いていた疑問をぶつけた、が、
「え？報告とか許可って必要だったのか？いや確かに市役所とかに住所とか届け出る必要はあるけど、遠坂が職員な訳はないだろうし、とすると魔術関係のか？だとしたら親父は一体何をしていたんだか…」
それを聞いた士郎、初めて知ったと言わんばかりのうろたえ振りを見せた。
「え、いや、ちょっと待って？衛宮君、これはいたって真面目な話よ？」
「そ、それは分かっているさ。遠坂がその、魔術関係において冬木市の管理を担っている事とか、俺達が１０年位前から、結果的に隠れ潜む形でこの屋敷に住んでいた事を問題視しているとか、聞きたい事はちゃんと伝わっている。ただ親父、魔術関係の事は何一つ俺達に教えてくれなかったからさ、そこら辺全て、遠坂から聞いて初めて知ったって状態なんだよ…」
「は、はぁ!?」
その様子がふざけていると捉えた凛は真面目に聞けと注意するも、士郎もそれは百も承知の事、その上で疑問に答える上での前提となる情報が全く無いと言って良い事を白状すると、凛は信じられないと言わんばかりに驚く。
「ま、待って。じゃあ、魔術協会って聞いたことある？名目上は、今衛宮君が推察していた魔術関係の管理組織なんだけど…」
「いや、知らない」
「そしたら、どうやって魔術を使うかは」
「それは流石に知っているよ。俺達魔術師の身体に、疑似的な神経の形で張り巡らされている魔術回路を起動して、其処から詠唱とか動作とか、何らかのアクションを取って魔術を発動させる。常識だろ？」

「ま、まあ基本的には衛宮君の言った通りだけど」
「尤もこれ、親父から教わる事無く最初から『知っていた』し、今使える魔術も最初から『使えた』んだけどな。だからかな、魔術に関して教えてくれってしつこく頼み込んだ零達には『士郎から教わりなさい』と俺に振るし、俺が頼み込んでも『なら士郎への宿題。零達に魔術に関して教える事。良いね？』の一点張りで、結局５年前に亡くなるまで１つも教えちゃくれなかった」
　其処で漸く凛は、士郎は本当に何も知らないんじゃないかと考える様になり、幾つかの知識を確認するが、その予想外な返答には、
「は、はぁぁぁぁぁ!?て事は何、私達は魔術に関して何の教育も受けていない常識知らずに、我流その物の粗削りな魔術しか使えない野生児にあっさり返り討ちにされたって訳!?なんて出鱈目…！」
「な、なんでさ!?何で野生児!?いや確かにそうとしか言いようのない戦い方だけどさ…」
　先程の混乱が再発した。
　流石にその言い方はどうなんだと士郎は指摘するが、そうなるのは無理もない、凛が混乱状態に陥っている事から話し合いは中断された、
「士郎、今帰ったぞ、お？遠坂じゃねぇか？どういう風の吹き回しだ？」
「戻りました、士郎、おや？アーチャーに、貴方は…!?」
「お義兄さん、只今帰りまし、ね、姉さん…？」
「へ？え、さ、桜…？」
　が、それも程無く終わった。